

71-466



た  
ら  
め



緒言

維新以來朝となく野となく泰西の文物を模擬し  
 所謂長と取り短と補ふの説は全國を風靡して、  
 遂に今日の新日本となしたることなるも、政治  
 法律の喧ましき議論は姑く措き、日常目に觸れ  
 耳に聞く所の事物は、今猶ほ變化の時代に在り、  
 今後又如何に變化するか實に豫測すること出來  
 ぬ次第なれば、新條約は遠ざらず實施せらる

づく、内地雜居も同時に行はるゝことゝなりたれば、一むら十まで歐米の眞似するにも及ばずと云ふ人もあらんが、去りとして頑固に舊慣を維持せんと論には何人も同意せざるべし、依て吾輩は斯くもありたらんには如何と思はるゝままを記して、甚だでたらめなむら敢て世人の教を請ふことゝなせり

明治三十一年十月 大阪毎日新聞

でたらめ記者

でたらめ

目次

- 訪問の事……………一
- 訪問の區別……………四
- 時刻の事……………七
- 宴會の事……………一四
- 夜會と酒筵……………一八
- 音樂歌舞の事……………二二
- 無益の謙遜……………二八

亂酔の事……………三二  
 衣服の事……………三五  
 燕尾服其他……………四〇  
 洋食の事……………四四  
 洋食の食方……………四八  
 歸りの土産……………五二  
 心配に及ばぬ……………五五  
 食事後の注意……………五七  
 西洋真似損ひ……………五九  
 帽子の事……………六七

靴とシャツ……………七〇  
 婚禮と葬式……………七四  
 會葬者の注意……………七八  
 葬式の弊風……………八二  
 喪章の事……………八七  
 名刺の折方……………九一  
 貧乏ばなし……………九五  
 内外人の交際(一)……………一〇〇  
 内外人の交際(二)……………一〇五  
 男女交際の事……………一一三

名刺の事……………一三五

警察官……………一二九

御役人風……………一三五

兒女の整列……………一三九

或人に答ふ……………一四二

音讀の事……………一四五

女らしい紳士……………一五〇

婦女待遇に就て……………一五五

席順の困難……………一六〇

席順の定め方……………一六四

お客の代人……………一七五

お客の代人(再び)……………一八〇

贈物の弊……………一八五

東西習慣の相違……………一八九

外套の事……………一九三

休日の事……………一九七

風俗習慣……………二〇八

公園の事……………二一六

道路修理……………二一九

人力車の取締……………二二九

宴會の時刻……………二三五

宴會の作法……………二三九

目次終

でたらめ

訪問の事

(一) 訪問の事

前ぜん以もつて約やく束そくあるか、約やく束そくなくとも親しん友ゆうの間あひだなるか、又または急きふ用もちあるか、それ等らの訪はつ問もんは別べつ事じであるが、普あつ通つうの訪はつ問もんは文ぶん明めい國こくでは大たい概がい午ご後ごに限かぎる、然しかるに日にっ本ぽんの訪はつ問もんは大たい概がい午ご前ぜんで、宛ま然ぜん反はん對たいなるのみか、午ご前ぜんも午ご前ぜん、早さ朝ちやう、而しかも主しゆ人じんの未いまだ起おきぬ中ちゆうに出いかけ、成なるべく早はやく他たの客きやくに先さきつて面めん會かいせんとして訪たつねて行ゆくやうな風かぜがある、至し急きふの用もち事じであれば夫それも仕し方かたがないが、普あつ通つうの訪はつ問もんならば大たい概がい晝ひる

過が便利であらう、役所へ出る者でも、會社其他へ出勤する者でも、朝は多少忙しい、午後定刻に達して帰宅した後か、或は帰宅前役所又は會社にても、用事を仕舞つた頃に人の訪問も受け、人をも訪問すると云ふことになつたならば、彼我どもに餘程便利であらう、何分早朝に競争して人を訪問するは、間違なく主人に會へるかは知らぬが、彼我に取て随分不便のこともあり、又餘り他所の國にも見當らぬ風俗であるから、是は改めた方が宜しからうと思ふ

中には確かに在宅すると思つて出掛ても不在だと云ふ、其實は居る日もあるらしい、さう云ふことでは交際上甚だ面白からぬやうに思はれるから、大概何日々々には居る、又何時から何時の間には面會が出来ると各々極めて置く方が便利であらう、追々社會の事も繁多になるに至ては、尙更以てさう云ふ取極めがなければなるまい、是は歐米各國にも多く見る所である、又東京邊で交際社會に出る人々は、今日でも大概婦人だけには受日と云ふものゝを定めて置いて、一週間の中何の日に何時からは會へると云ふことになつて居る、マア日本ではさう云ふ人達を除いては婦人の交際は少ないから、何方でも宜しいやうであるが、シカシ婦人に限ら

す男子にも面會の出来る日と時刻が極つて居つたならば、お互に時間を節して用も辨じ交際も出来甚だ都合が宜からう、此風俗は決して殊更に西洋風を學ぶと云ふ譯でもないが、然う云ふ取極めがあつたならば、餘程便利ではあるまいか……

### 訪問の區別

用事の爲めに訪問するのと、普通見舞に訪問するのとは、判然區別の出来る場合もあるが、シカシ大體趣旨が違つて居る、普通の用事で面會する場合には、早く其用事を辨じて歸るのが適當である、何うも用事があつて來たのやら唯だの訪問に來たのやら、暖

昧の間に長談をして時間を費し、ヤツト歸り掛になつて用談を始めるなど云ふことは、随分世間に澤山ある習慣だが、是は甚だ不都合な話で、用事ならば初めから用事を談じて歸るが宜しい、歐米諸國では生存競争の度が烈しいから、時即ち金なりなど云つて、中々時間を争つてソツナ無駄なことをしては居らぬ、日本の時なりとて一文の價もなしと云ふ譯でもないから、用事ならば早く其用事を済して歸る方が主人にも迷惑を掛けずお互に便利である、又然らずして尋常の訪問と云ふことであるならば、是は初めより用談の爲めではないから、成るべく用談は避けると云ふ位にして、普通の談話に限るが宜しい、但しさう云ふ場合には大概



其人一人が面會する譯でなく、多くの人も面會して差支ないのであるから、主人さへ不都合なければ多少雑談に時を費しても宜しからうが、何うもさう云ふ風に區別が附いて行かぬと云ふと、無駄に時を費したり、又時を費す上に一向用事も抄取らぬと云ふやうな結果になりはせぬか……又日本では左まで正しくは遣て居らぬけれども、兎に角普通の訪問を受ければ、文明國では答禮として其人の處に行くか又場合によりては名刺を送るのが先づ普通である、用談に來たのならば、何も答禮するには及ばぬ、所が用事で來たのやら普通の訪問であるやら判らぬと云へば、答禮に行て宜いやら悪いやら迷ふと云ふことにもなる、故に是は判然區別す

る方が宜からう、其區別をするにも左迄面倒はない、用事ならばサツサと用事を話して歸り、今日は用事の爲めに來たと云ふことを明かにすれば宜しいのだ、又普通の訪問ならばそれ相應の趣意を現はして歸ればそれで宜しい

時刻の事

大阪では大阪時間なぞと云つて、一時間も二時間も互に掛直をして居るやうな風があるが、是は必らずしも大阪ばかりでもない、随分日本では何處にも時間を構はないと云ふ習慣がある、古より斯くあつたであらうとは思はれぬ、多分維新前後一時禮儀を餘

り構はぬと云ふやうな破壊の時代に起た習慣でもあらうか、兎に角歐米各國とは大違ひの習慣である、マア一時間や二時間は指定の時刻に後れても大概平氣で居る、尤も田舎などには二度も三度も催促を受けなければ行かぬと云ふ習慣もあるさうだが、夫は片田舎の一笑話と思の外都會にも此節は使か電話で一兩度催促せねば出て来ない人がある、是は用事があつて面會する場合でも、何かの集會で大勢集まる場合でも、又普通の宴會に招かれた場合でも皆な同様である、それ故に何時何十分に面會すると云ふから、チャンと約束の時間に其人を訪ねて行けば、案外主人が居らなかつたと云ふやうなこともある、又集會や宴會にも何時何十分にか

出下さいと云ふから、其時刻に行つて見ると、無論に誰も居らぬ、取次の者は怪訝な顔をして居る、馬鹿々々しいと思ひながら夫へ這入て待て居ると、何時まで待ても誰も来ない、お負に之が私宅ならば格別、料理店などでは此人は何しに来たか、あまり世間の寸法を知らぬ人だとか、御馳走でも食ひたがつて大急ぎで来たらうとか、陰言を言はるゝやうな心持がする、それは貴様達の方が物を知らぬのだと心で威張て我慢するとした所で退屈極まる、さう云ふ譯であるから一人几帳面にした所が仕方がない、矢張次には遅く行く、ソコで相互に遅く行くことを競つて遂に不規則に流れる、小集會でも大集會でも、西洋風の宴會でも日本風の宴會で

も、兎角其通りである、所で此事を人に話をすれば誰も彼も困つて居る、イヤ實に何うも呆れると云つて其弊害を歎息して居る、弊害を歎息して居るならば皆なで改めたら宜さうなものだが改めない、唯歎息する許りである、故に是は思ひ切てお互に斷行するより外仕方がない何時何十分に面會すると云つたら其時には必ず主人が居る、是は時を極めた方が人が待て居るのだから、少し心掛けさへすれば出来る、



さうして其時に來なかつたら面會しないと云ふことにするが宜しい、又集會や宴會などには時と場合に依て十分とか十五分とか多少の斟酌は宜しいが、多くの時を費やさぬやうに必ず定刻には相談なり食事なりを始める、夫から後に來た人はお氣の毒ながら追還して仕舞ふ、さう遣れば宜しいのである、少々憎まれるかは知らぬが、一兩度遣れば物が極まる……、然るに此追還策を斷行することが出来ぬと云ふのが、則ち人情の弱點で、切角人を招んで置きながら、其人を追還して不快の念を抱かせることは忍びないとか、或は又用事の場合でも少々の事は待て遣らなければ、用が足らぬなど云つて、お互に辛抱する、大層美風のやうだが決して左様で

ない、ツマリ之が何時までも此風俗の改まらぬ本である。からしてお互に此邊に注意して几帳面に遣るより外に仕方がない、畢竟時刻を違へたり何かすると云ふことは、主人に取ても客に取ても失禮のことであると云ふ念慮が定まりさへすれば、之を追還した所が一向差支ないのである、歐米などでは無論其通りで、少し位は待つ場合もないとは限らぬが、シカシ先づ大體を云へば、約束した時に來なければ面會しないのは不思議ではない、當然と思つて居る、集會や宴會などでも左迄時刻を争はないもので、何時から何時までに來れば宜しいと云ふやうなものは別段だが、左様でないもの殊に食事などに至つてはチャンと時の極まつて居るも

のであるから、其時を過ぎて來た人は追還して仕舞ふ、之を氣の毒とも何とも思つて居らぬ、却て追還された方で甚だ失禮の事をした相濟さんと云つて居るんだが、日本では却て反對に追還するが氣の毒だと云つて心配して、追還される方が不平を云ふやうな習慣になつて居る、是は全く事理轉倒の話である、普通人間交際の道理から考へて見ても夫ぐらゐの事は解らなければならぬ、大阪時間など云つて平氣で居る向は尙更以て改めなければならぬ……

宴會の事

近來宴會の有様を見るに、極く規則立つた會でなければ、極く墮落なる會より外なくつて、其中間のもものが誠に少なく見ゆる、例へば西洋風の宴會などで規則立つた場合に出會ふ、此時には多くの客が先づ物を澤山言はぬのが通例である、何やら食物だけ食ひに來たかのやうに、碌々談話もしない、歐米各國では、さう云ふ場合には互に打解けて、面白く話を爲合つて、食事なら食事を終り、夜會なら夜會を終るのであるが、何うも日本ではさう云ふ所へ行くと妙に頑くなる、此所へお出なさいと云つても辭退して

來なかつたり、何となく頑固しくなつて、碌に物も言はずに歸ると云ふやうな風がある、さうかと云つて此場合にもチヨイと度を過すと、夫から先は高聲に管を巻いたり、随分不體裁を遣る、又其他の宴會、例へば料理屋で藝者でも來て騒ぐと云ふ場合、是も初めはチヨイと几帳面にして居ることもあるが、直に何とも言へぬ言語同斷なる舉動になることが多い、是は誰でも知て居ることで、何うも此言語同斷なる云ふに忍びざる墮落の宴會と、皆なが縮み上つて仕舞ふと云ふやうな宴會と、此二つに分れて居つて、其中間に立つて適當に面白く交際を了ると云ふやうな宴會は、無しとは限らないが誠に少ない、西洋風の晚餐にしても夜會にして

も、又日本風の宴會にして  
 も、餘り自墮落の舉動をし  
 てならぬことは無論の話で  
 禮に始まつて禮に終らな  
 ければならぬが、さりとて  
 皆なが縮み上つて、碌々物  
 も言はない程窮屈に遣ると  
 云ふことも甚だ困るぢやな  
 いか、丁度田舎の百姓を連  
 れて来て座敷に据ゑたやう



に、足の痺れるのも構はず、几帳面に物も言はずに苦しがつて居  
 るが、さうでなければ胡坐をかいて濁酒でも飲んで、太平樂を並  
 べると云ふやうな者である、どうも立派な紳士とも言はるゝ人が  
 一皮剝ばソナナ様子の見ゆると云ふのは歎息の話である、兎に角  
 極く打解けた友達同志の會合などは別段として、さうでない場合  
 は多少禮儀を守りて各々歡樂を盡すと云ふ習慣でなければならぬ  
 又西洋食であると、無茶苦茶に物を食つて、食つて仕舞つたから  
 直に歸るなど云ふのは大阪に多いが、どうも食事一方で行くの  
 ぢやない、飯は宅でも食へるが、多くの人が集まつて食事をし、  
 其間に面白く談話をもするので、始めて其會合の趣意にも適ふの

である、碌々物も言はないで無茶苦茶に物を食つて、食つて仕舞つたから直に歸るなどは實に不體裁極まる話だ、食事の間も無論緩くりと談話をして、さうして食事が済んでからも、煙草でも喫むとか茶を喫むとか、少くもお互に三十分や一時間は打解けて話でも爲合つて、歸ると云ふやうでなければ、どうも禮に始まつて禮に終つたものとは言へない

夜會と酒筵

夜會などに至つては尙更のことで、各々集まつて話を仕合ふのが趣意である、夜會の時に立食などは實は御馳走の中に數へられぬ

ので、唯長く談話をしたり舞踊でもあれば尙更のこと、さう云ふ事をして居れば腹の空くこともあり、喉の乾くこともある、故に多少其等の用意に飲物や食物を備へて居るのであるから、此飲食を趣意としたのではないと云ふことを覺らなければならぬ、然るに日本の夜會を見ると、煙草を喫む部屋には皆な籠城して煙草ばかり喫で居つて見たり、然らざれば腰掛に腰を掛けて唯目ばかりパチリ／＼して睨み合つて居たりして、食堂が開くるや否や兵隊が突貫する様に進撃して食卓前に大騒動をするやうな有様である、歐米ではまるで反對で、さう云ふ席では婦人は椅子へ腰を掛ける、が、男子は餘程老人でなければ腰を掛けるものはない、第一

椅子があらはしない、皆な方々駆廻つて甲の人に會て話をしたり、乙の人に會て話をしたり、夫が交際の廣い人と廣くない人との分れる所で、互に快談を試みて居り食堂に行にも大騒動はしない、又日本の宴會の席で墮落する有様を見るに、自分の宅よりも甚い、自分の宅では割合に慎んで居るが、他所では途方もない不體裁を働く、尤も私宅へ招れて行つた時でも又招た時でも事に依ると妻君や娘子の居る所で、言ふべからざる聴くべからざる話をする、其度毎に冷汗の出るやうなこともある、さうかと思ふと又或る席では餘り四角張て膝も額さずに固まつて居る、亭主も困難だが客も少しく面白くない、それも私宅ならば未だく宜しいが、之が

料理店でいもあれば大變だ、さうも非常に窮屈がつて、内々今日には實に堪らぬと云ひながら畏まつて居て其儘引取るか、さうでなければ亂酔れて仕舞つて、そこらへ來た藝者を捉へたり何かして騒ぎ廻る……切角主人の好意で藝者に藝をさせて見せるとか、落語家を呼で落語をさせるとか云ふやうな場合にも、何うも聴きたくもないのを瘦我慢して聴いて居るやうな場合もあるが、又一向ソソナことに順着なく、人の邪魔にならうがなるまいが平氣で談話な姿をして居る人もある、主人は主人として客の退屈せぬやうに注意しなければならぬが、客の方でも其間は辛抱して見て居るとか聴いて居るとかしなければならぬ筈である、それが済たらか



互に打寛ぎて談話をして大概の所で切上げるが宜しい、但し親友同志で二三人集まつて亂酔れると云ふやうな事は多少寛大に見る事情もあるから夫は云はぬ

### 音楽歌舞の事

西洋風の宴會に近頃音楽隊を招くことが流行する、至極面白いやうではあるがこゝに困難な事がある、東京邊では多少の注意も届いて居るらしいが、大阪では家の外にて催す園遊會の類は別として、室内に於て催す宴會の類例へばホテルで催す宴會の類は、ホテルのことであるから、部屋都合も思ふ様には出来ない、總て

の準備に不足のあることは免がれない、夫ゆる大に咎むることの出来ない事情もあるが、食事もする演説もすると云ふやうな同じ室の中で奏樂する、それはく逆も話も何も出来たものぢやない、勿論演説でもする間は奏樂を止めるから解りもするが、其他は食事中でも立食中でも、同じ部屋の中で音楽をドン／＼遣られるから、其ドンチャン騒ぎで話も何も聴けない、御馳走の様であるが、或る場合には迷惑に感ぜられることもある、故に此音楽は矢張西洋風に、その客の居る部屋の外の廊下か若くは次の部屋か、兎に角少し離れた所で遣る方が宜からう、さうでないで音楽を聴いて楽しむ所ではない、音楽の爲めに耳が聾になる、ホテルのやうな

所を借用する時は彼是正式のことの出来ないのは無論だが、シカ  
シ是ぐらゐの事は何處で催しても一寸注意すれば出来る話と思ふ  
それから又楽譜の事である、何時も君が代、春雨、マア色々遣る  
が何が何やら順序が解らぬ、尤も君が代を遣られた所が、それが  
君が代であるか何であるか、其時には敬禮を表さなければならぬ  
ものであるやら、一向其邊の理屈も解らない、況して音楽好し悪し  
を聴分けることなどは尙更解らぬと云ふ人もないではないから、  
唯その音を聴いて居る計りであるけれども、去りながら其場所柄  
が正式でない時に君が代を遣て見たり、又或は規則立て居る正式  
の場所で春雨ぐらゐは未だしも、甚しきはカツボレまで附加へ

ると云ふやうな騒ぎをする、これは興の覺めた話である、斯う云  
ふことは正式に組織された音楽隊にはあるまいけれども、兎に角  
奏樂は音楽者ばかりに任せずに多少音楽をなせる方でも、其種類  
に就て注意すると云ふ考を持つて貰ひたい  
又日本食の宴會のことである、これも極く小人數集まつて酒を飲  
み食事をすると云ふやうな場合は別として、少し人を多勢招くと  
か或は懇親會の席上などで藝人を呼んだり藝者に藝をさせたりする  
ことがある、これはもう誰も慣れて居ることであるが、少し注意  
をし改良を加へぬと困る、第一は了度食事をすべき時刻に人を招  
いて置いて、それも例の通りの不規則であるから定刻よりも皆後

れて来る、さて後れて来て  
何うなるかと云へば、落語  
があれば落語をする、或は  
講釋ならば講釋をする、時  
には又義太夫の二三段も續  
けさまに遣られて、途方も  
ない時間を費すこともある  
、と云ふやうな譯で、兎に  
角相應に時刻の後れた上に  
又長々と種々な事を遣られ



る、どうも客に行た者が御馳走になる爲めに行たのやら苦しみに  
行たのやら、殆ど譯の解らぬやうなことになる、故に斯う云ふ催  
しでもある時は、客の方でも主人の好意を空しくしないやうに、  
注意して観るなり聴くなりすべきであるが、主人の方でも、能く  
前後の時間などを見計らつて、客の退屈しないやうに、又空腹を  
抱へて辛抱しなければならぬと云ふやうな迷惑を掛けぬやうに注  
意しなければならぬ、酒食中でも其通りである、舞なり歌なり藝  
計りの會ならば格別であるが、さうでない以上は酒食の間にチヨ  
イ／＼した事を遣る丈けは宜しいが、客が盃を置き箸を捨て茫  
然と三十分も一時間も酒食を中止しなければならぬと云ふやうな

事をせぬやうに、能く注意しなければならぬ、どうも維新前と今日と較べて見ると、人を饗應するなど云ふことに就ては變遷も多いが、近頃随分下品になつた傾きがある、之を名々で注意して改良を加へると云ふことは、唯禮儀を正し體面を作ると云ふばかりでなく、各自の歡樂を遺憾なく盡すと云ふ點に於ても必要であらうと思ふ

無益の謙遜

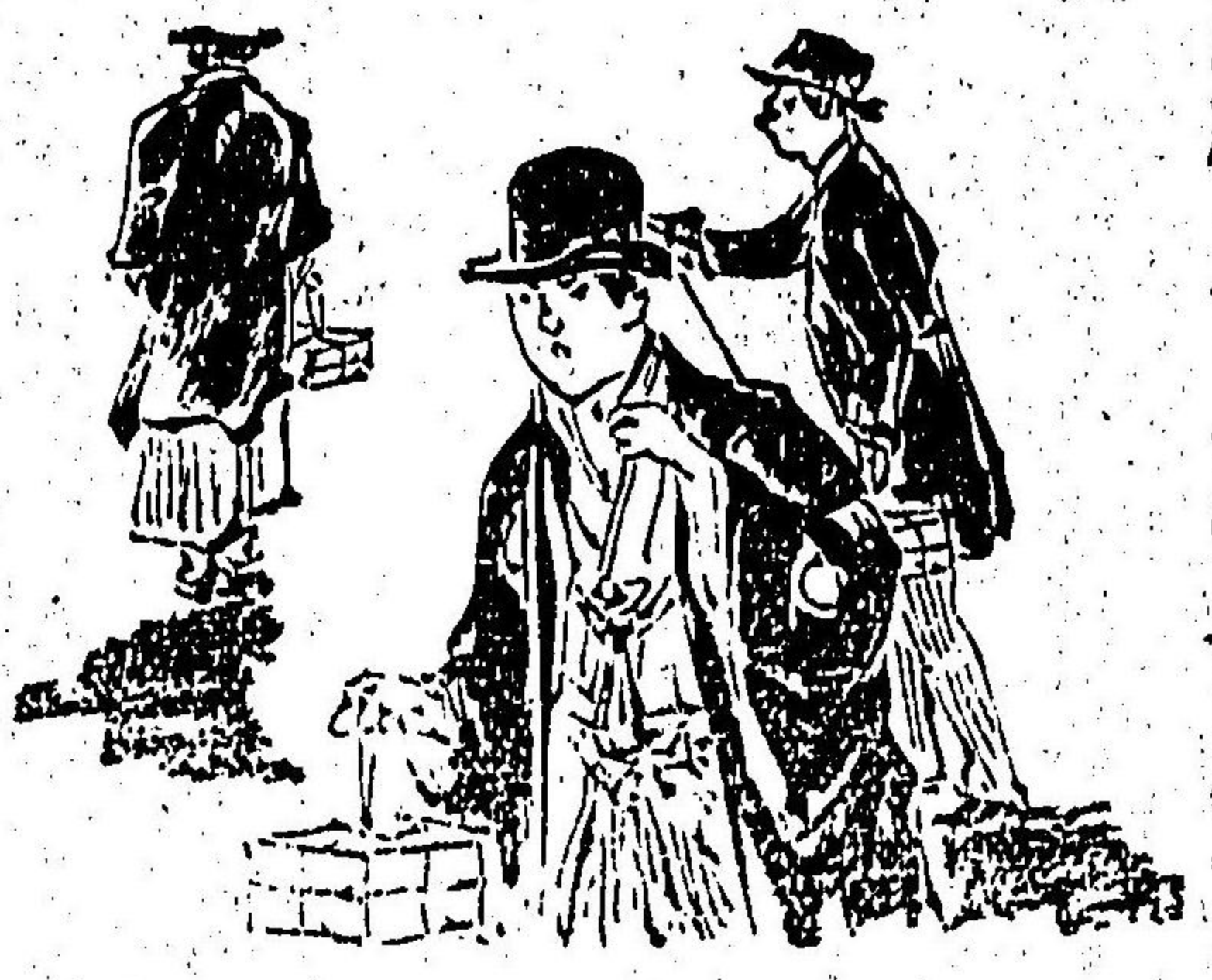
西洋食事で席順の定まつて居ると云ふやうな所は不都合もない、又日本食でも其席に名前でも書いてあると云ふ場合は大した不都合

合もないが、席順の極めて無いと云ふ時には甚だ難儀をする、ア貴方がお先に、イヤ貴方がと云つて却々動きやしない、これは東京邊でも可なりある習慣だが大阪は殊に酷い、事に依ると席順を極めて名前を書附けて置いても尚ほ讓合つて居る、甚しきに至ては笏と席に書いてある名前を取換たり何にかする連中がある、兎に角此有様を見れば、實に何うも何とも云へぬ謙遜家で、何とも云へぬ堅い人のやうで



あるが、さう三十分も一時間も押問答した後、漸々席に着いて、扱それから何うなるかと云へば、言語同断、少々酒が廻ると全く別人のやうになる、酒を飲む人は酒の爲めとも言はうが、酒も何も飲まぬ人にて途方もない話をする事ともあれば、若し又其席に藝者でも居れば途方もない戯れをもする、兎に角席に着た後と云ふものは大變である。先づ普通ならば、此處で袴があれば袴を取らうが、それからもう遠慮なく胡坐をかく者もある、膳を差置て彼方へ行き此方へ行き、所謂盃盤狼藉で大騒動をする、其大騒動を以て盛なる宴會など、稱して居る、さうも最初の謙遜と後

の有様とは甚だ違ふ、お負に歸り掛には成るべく食物の残などを持て歸りたがる人もあると云ふが、ソナナ事は餘り言ふに忍びない、之中以下の弊風と見て、兎に角最初の謙遜と後の騒動とは餘り違ふから、少しは何とかしたら宜からう……全體席順を書いて定めて置かぬと云ふ位の宴會であれば、席を争ふ必要はないのである、各々適宜の所に坐して打寛いで談話をして宜しいのである、初めから騒動を遣らか



す覺悟を以て無禮講にしないでも無論宜からうが、席は大槪の所に定めて、主人にも迷惑を掛けず、客同志も無駄の時間を費さぬやうにするが宜からうと思ふ、ユмна事を以て謙讓の美德と心得て居るのは餘程辻褄の合はぬ話だ

亂酔の事

食事宴會、總て酒を飲む場所に亂酔れると云ふことは、近來段々減つたと云ふ説もある、どうであるか少し覺束ないが、假に減つたとしても随分今日も澤山ある、酒を飲んで酩酊すると云ふことは、歐米各國では非常に耻入ることとして、人の前などでは話

もこれのと云ふことになつて居る、又亂酔なぞをする者には人も附合つて呉れぬと云ふ有様である、それが爲めか何うかは知らぬが、市中を歩いてても日本のやうに亂酔者に會ふことは少ない、極く下等社會には稀に見ることもあるが、もう中から以上の者に亂酔れて歩く者などは一人もない、これは酒の強い爲めと云ふ説もあるが、歐米とてさうく大酒家ばかりある譯でもなからう、さう云ふことが非常に不體裁であり失禮であると云ふ社會の制裁から慎むのであらうと思ふ、所が日本は反對だ、マア市中の話は別として、先づ宴會などでは亂酔れるのが宜いとしてある、昨日は亂酔れて前後忘却致しました今日は頭痛で堪りません杯と云ふのは

御馳走に對する答禮の詞である、どうも亂酔れて宜しいと云ふ筈はない、成程酒は客を悦ばす爲めに飲ませる、又飲めば酔ふ、それとも不思議はないが、シカシ前後忘却する程亂酔れるのが宜しいと云ふことならば、飯を馳走されて食傷するまで食ふ、昨夕はお蔭で食傷しましたと言つたら何うである、これは何うもお禮にはなるまいと思ふ、物には大概の度合がある、酒を飲んで酔はぬと云ふ譯には往かないが、酔ふても人の大勢居る所などでは、成るべく酔ふた振を見せぬ位の覺悟がなければ、人間の品性と云ふものは保てないのである、殊にこれから外國人と交際をする様になれば尙更のことである、故に此邊に少し注意してお互に改良し

たいものと思ふ

### 衣服の事

日本服に就いても近來は以前の如く嚴格でないから、色々無作法の事もある、併しながら日本服に就ては、如何なる場合には如何なる衣服を着用するのが適當であると云ふ、一通りの體裁は誰でも知て居るから、縦し無作法の事不體裁の事をするとしても、是は本人の知らずしてすることではない、何時でも必要の場合には正式に改めることが出来るであらうと思ふから、強て論ずるまでもない、唯一言して置きたいのは成るべく、不體裁な風のないや

うに心掛けて貰ひたいと云ふに過ぎない、洋服に至りては日本服とは大に趣を異にして、多くの場合は知らずして不體裁な事をするやうである、先づ洋服を大體に就て區別すれば、ジャケット、モーニングコート、フロックスコートと云ふやうな區別になる、其以上に至れば燕尾服、これは小禮服など云つて居るから別物である、全體衣服は時と場合と又國に依ても違ふ、先づ歐米と云ふ中、歐洲の大陸殊に佛蘭西地方などでは、常に誰でもフロックスコートを着用して居る、散歩や旅行をする時又は家で仕事をする時の様な略儀の場合でなければ、ジャケットやモーニングコートを着用しない、其他の國では必らずしもフロックスコートに限らず、種

々の衣服を着用して居るが、詰りフロックスコートを常服として居る所は其のフロックスコート、其他を常服として居る所は夫を常服として宜しい、日本では何れが常服とは極まつて居らぬが、先づフロックスコートならば時としては燕尾服の代用をする程と心得て居る人が澤山ある位であるから、マア少し改まつた時はフロックスコートが宜からう、其他は何れでも宜しいと云ふやうな事にして居れば不都合もなからうが、燕尾服に至りては是は場合が違ふ、英吉利などでは家族集まつて食事をする時にも晩食なれば燕尾服を着用する、ホテルに行つても晩食には燕尾服を着用する、ツマリ晩食の服として居る、又其他の國で左程燕尾服を着用しない所でも、



例へばオペラを見物に行くとき云ふやうな場合には、矢張燕尾服を着用して行く、オペラの外の芝居でも随分立派な芝居には、燕尾服を着用して行く者が多い、此の燕尾服を日本では小禮服と唱へて居る、これは随分小禮服として使用して居る國は外國にもある、あるが必ずしも禮服の意味がなくても用るのが即ち晩食の時又は芝居に行く時にも用ふると云ふの類である、けれども日本に於いては兎も角小禮服としてあるから、餘程儀式立つた時でなければ着用するには及ばぬ、去りながら東京邊では既に懇親の者だけが集る晩食の外、相當の儀式を用ひる晩餐には矢張燕尾服を用ひて居る……全體晩餐に就て案内をするのに、案内状に殊更に大禮服

と云ふ注意があるか、又は極く略儀であると云ふ注意のあつた時には別段の事であるが、是等の場合を除いては、即ち特別に案内状に示してない場合は、何時でも燕尾服に極まつたものである、これは先づ歐米各國を通じて大概さうである、故に日本に在留する各國公使始め多國人は矢張其體裁を襲用して居る、又日本人でも外國交際をする者は其通で有、けれども一般の人は多く晩餐に燕尾服を着るのが通例であるとは心得ないで、まるで反對に特に燕尾服と記して無ければ着ないやうに心得て居る、これは大なる間違ひで、案内状に何も書いてなければ燕尾服を着る、何か書いてあれば其指定したる衣服を用ひると云ふのが歐米では正式である

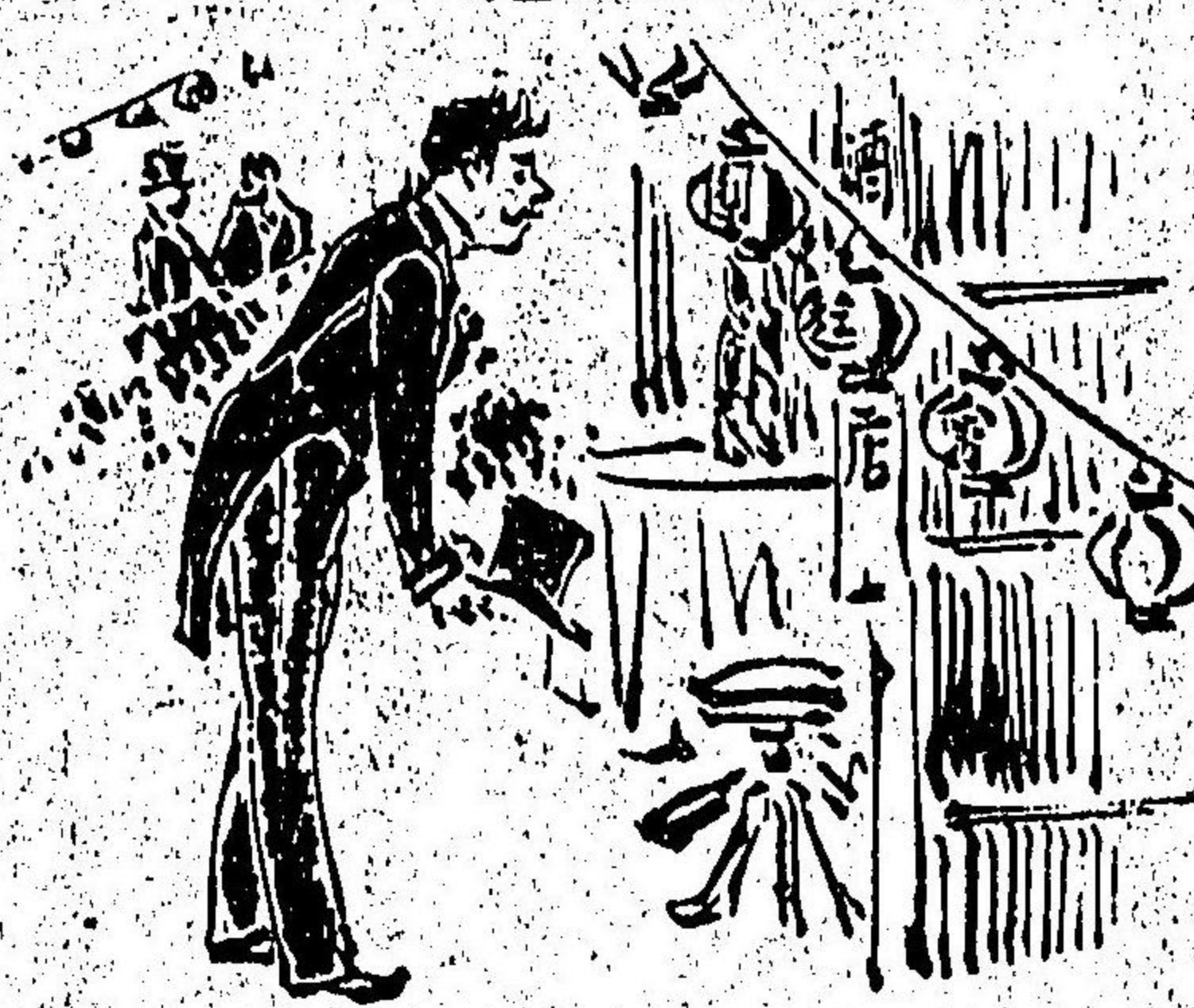
から、之を能く間違へて不體裁なことをする場合が多く見ゆるから、一通り心得て置く方が宜からう

### 燕尾服 其他

又燕尾服を着用する代りに、フロッツコートを着用して宜いと心得て居る人があるが、これも非常な間違ひである、フロッツコートで宜しいと云ふ場合に、燕尾服を用ふると云ふ方ならば、少々餘計な事をするに過ぎない、尤も園遊會に燕尾服を着用する人がある是れは少しく見苦しい、其他は甚しき不體裁とも云はれぬが、若し燕尾服を用ふる場合にフロッツコートを着用したな

らばそれは實に大間違の話で、どうも其席に臨んで不體裁極り他に對しても失禮極まると云ふことになる、尤もフロッツコートを小禮服に代用しても宜しいと云ふ時代も有たが、フロッツコートは元來禮服の代用は出来ない、フロッツコートは先づ羽織袴と見れば宜い、羽織袴は上下の代用にならなかつたと同様に、フロッツコートは燕尾服の代用は出来ぬ、ツマリ或る場合にはフロッツコートも羽織袴も常服で又或る場合には少し廉立た服となる、即ちジャケットやモーニングコートを着るよりは、フロッツコートを着る方が少し體裁が改まる、丁度着流しよりは、羽織袴の方が體裁が改まると同様だ、大體其位の關係であると思へば間違はなからう、

又燕尾服を着用して居る場合には、帽子は夜會でも晚餐でも、絹  
 で出来て居るオペラハートである但  
 し屋外に於て執行する儀式其他の場  
 合であれば俗に禮帽など、唱へて居  
 る高帽子である、又燕尾服ならば靴  
 は必ず塗靴、手袋は白、襟飾も白、是  
 れはさう極まつて居る、然るに之を  
 間違へて、室内で携へて居るべきオ  
 ペラハートを屋外で被つて見たり、  
 屋外で被る高帽子を夜會や晚餐に携へて見たり、又切角小禮服や



帽子が相當に出来て居つた所で、其靴を見れば普通の皮靴であつ  
 たり、甚だしきは赤皮の靴を用ひて見たり、又はブーツなどで  
 出来た靴を用ひて見たりする、これは實に上下で草鞋と云ふ姿だ、  
 是等も一通り注意すれば直さうなことと思ふ…又フロックコート  
 の場合にもさうだ、フロックコートを着用すれば随分高い帽子を  
 被らなければならぬ場合がある、其高い帽子を被る場合に、或は  
 例のオペラハートを使用して見たり、又は普通の帽子甚だしきは  
 麥藁帽子などを用ひて居ると云ふ不體裁もあれば、靴も例の赤皮  
 やブーツなどの類を用ひて居ることもある、又襟飾にしても區々  
 なことを遣て居るが、これは廉立た場合でなくして散歩でもする

と云ふならば、何でも構ふまいが、さうでない時には随分體裁を誤るのである、此場合には塗靴は必要ともしないが黒き皮靴、帽子も亦必ず高帽子を用ふるが宜からう、襟飾は何なりと其時次第である、手袋は西洋ならば必ず何か用ひなければならぬ、夏ならば薄皮で造たもの、冬ならば少し厚いものを用ふる、無論毛の附いたものやメリヤスなどは決して用ひぬ、けれども日本では多く手袋を用ひずに居るから、其邊は大概で宜からうが先づ一通りさう云ふ順序である

洋食の事

洋食の事に就ては、世間に色々な奇談がある、又新聞などにも現はれて居るが、兎に角洋食は普通の人には困る場合が多からう、外國へでも行て來た者は宜しいが、是とても相當なる交際社會に這入た人でなければ、矢張眞正の食方は知らないのである、況や日本に計り居てはさう云ふ場合に出會ふことが少ない、何うも西洋料理屋へ行て、五拾錢や壹圓の代價を拂つて食ふのでは、西洋料理の解釋は出來はしない、故にこれは大に恕すべきことであらうと思ふが、併しながら日本人が洋食を食ひ始めてから、随分長いことであるから、一通りの事は皆心得なければなるまい、其心得と云つてもさう六ヶ敷いものではない、大概洋食の種類は斯う

云ふもので、斯う云ふ順序であると云ふとを一通り吞込めば宜しいのである、夫は英吉利風佛蘭西風などと云つて色々な流儀もあるが、大體ソップの次は魚肉、鳥肉、獸肉、野菜と云ふやうな順序で、ツマリ御馳走が多ければ其間に種々な物を加へたり何かするるので、大體の骨組はソッパものである、さう云ふ順序で出て來るのであるから、必ずしも給仕人が持て來たものを残らず食はなければならぬこともないが、と云つて其間を抜いて食ふにしても、マア凡その順序を吞込で食はなければならぬ、勿論獻立でも出している席であれば随分取捨することも出来るが、それにしても大體の心得がないと途方もない間違をする……全體洋食は人の腹に

合ひ口に合ふやうに順序を立て出てくる、日本風では一度に何も斯も並べて出す風であるけれども、洋食は順々に持て來て一皿ずつ食するゆゑチヤンと順序が立て居る其順序を誤る様な抜方をすると妙な食方になつて失體を招くことがあるで、一通り心得て置く方が宜しい、是はもう一度獻立でも見ればア、大體はコンナものであるが後は之に依つて變化をして來るんだと云ふことは直に解るものであるから、洋食の御馳走の席へでも出るやうな人は見て置くが宜しい、さうでない時に臨んで思はぬ不覺を取ることもあろう

洋食の食方

洋食の順序は一通り知らなければならぬが、扱て其食方に就て甚だ可笑い事がある。是は随分東京邊にもあるから獨り大阪に就て言ふぢやないが、第一西洋食を遣て居る所を見ると、一體西洋食には大概程好く味が附けてある、故に之を味つて見て、若も鹽が足らぬと思ふならば鹽を附ける、胡椒が足らぬと思へば胡椒を掛ける、又物に依ては醬油を掛けるとか辛辣を附けるとかするのだ、が大概はそれを加味して口に合ふやうにしてある、所で今の洋食の食方を知らぬ人達の有様を見ると、肉が來やうが野菜が來やうが、何

が來やうが斯が來やうが、其度に鹽を掛けたり胡椒を掛けたりして居る、切角附けた味ひと云ふものは、之が爲めにもう失くなつて仕舞つて食へないものになる、それを何でも其處に藥味を入れた物があると云ふと、殊更にそれを掛けなければならぬやうに心得て、色々な物を振掛けたり何かして、途方もない不味い物にして食つて居る、これは日本食から割出して直に解る話だ、日本食でも適當の味ひの附けてある物に無闇に醬油を掛けたり鹽を掛けたりすると云ふことはない、のみならずソシナことをしてわ食へないものになつて仕舞ふ、それを一皿毎に是非何か附るか掛るかして食はなければならぬやうに心得て居るのは誠に笑止千萬、傍

から見ても氣の毒である、其人の口の工合で物を加味した方が宜いと思つた時に、適當な物を用ふれば宜しい、さう食事の度毎に故ら色々な物を掛たり附けたりして、不味い物にして食ふには及ばぬ、立派な食事になつたり、立派な場所になつたりすれば、色々な食方もあれば、色々な體裁もある、さう云ふ立派な事をこゝで陳べた所が、それは稀にしか無いことであるから必要もなからう、去りして何方の手にナイフを持ち、何方の手にフォークをもち、たと云ふやうな些事を平たく教ふる必要もないが、先づ大體の趣意だけは解せぬと、西洋食を食ふ法には適はない……もう一つ序でに言て置きたいのは、獻立の其處に書いてある時は無論の事、

獻立が書てなくても順序を以て食物を運んで来る、さうして一番仕舞の頃に菓子を食ひ水菓子を食ふと云ふのが、何處の國の食事でも先づ普通の順序である、卓子の上に菓子や水菓子を備へてあるのは之が爲めである、然るに時も構はず無關に此菓子や水菓子を取て食ふ連中がある、これは随分立派な宴會の席などでも度々見る、而も立派な人達が遣る、何うも食事の半ばで菓子を食つたり水菓子を食つたりすると



云ふことは少しも解らない、日本の食事にした所で、立派な食事中吸物を吸つたり肴を食つたり酒を飲んだり飯を食たりして居る間に、菓子や水菓子を勝手に取って食ふと云ふことは無い筈であるが、洋食だと遣て居る連中がある、これは卓子の上にあるから随意に取って食て宜いのだと云ふ誤解らしい、が夫は間違ひだ、其處に並べて飾てはあゝるが、食事の仕舞ふ時分には給仕人が持て廻るのであるから、さう勝手に食ふ筈のものではない

### 歸りの土産

大阪ではホテルなどの宴會の歸りがげに、何か以て歸る人がある

と云ふことである、白巾を持って歸つたりフオーツを持って歸つたりする人があると云ふ話だが、これは随分酷い話だ、マア八釜しく云へば泥棒だ、シカン其人に悪意のないことは知れて居る、不案内から起ることであらうが、さうも白巾やフオーツなぞを持って歸られて堪るものでない、殊に敷の揃つて居る物を持って行かれる後は端物となつて仕舞ふ、ホテルで通常使用するものは上等品でもあるまいけれども、それでも取られる方では困るから、近頃は白巾の代りに薄ッペらな半紙ぐらゐの縮んだ紙なぞを出して居る、何處の國にコンナもので間に合せて居る處があるものか、ホテルでもそれ位の事は知て居るんだが、良い物を出せば持て行かれるか



ら仕方がないと云ふ、これは大阪に限る、東京邊でも随分不體裁  
などはあつたが、近頃は眞逆ナブキンやフォークを持って歸つたど  
云ふ話は聞かない、どうも是だから大阪人は残飯や空瓶まで持て  
歸ると云ふやうな悪口を言はれる、兎角不案内でソツナ事を遣て  
居るだらうが、マア考へて見るが宜い、日本食に招かれて行て、  
其處の家の皿とか吸物椀とか云ふものを無闇に持て歸て宜しいも  
のか、西洋食だつて同じである、斯う云ふことは速かに改めぬと  
云ふと、内外交際の場合は扱措さ、日本人同志の交際でも堪ら  
ない、其外菓子を取て歸つたり、水菓子を持て歸つたりするが、  
是れは餘程罪の輕い方ではあるけれども矢張り甚だ失體の話であ

る

心配に及ばぬ

洋食の事を八釜敷く云ふと、随分困難する人もあるであらうから  
一言して置きたい、何うも少し立派なる食事に逢ふと縮み上る  
と云ふ風がある、何をどうしたら宜いやら。斯うしたら笑はれは  
しないか。ア、したら不體裁になりはしないかと云ふやうに、始  
終心配の色が見ゆる、給仕人が持て來た物を取るにも、左右を顧  
みて躊躇して居ると云ふやうな様子が時々見ゆる、これは洋食が  
不案内であるから起ることであらうが、シカシ人間社會の交際に

はソソナに心配せぬでも宜しい、一通りの事は誰も聴かなければ解らぬから、聴くが宜しいが、聴いて大體の事を悟つたならば、後は大概臨機應變、自分で不體裁と思はぬやうに爲さへすれば差支ない、餘り縮み上つて仕舞ふと云ふと、却て失策を多くするの基である、例へば給仕人が肉と馬鈴薯を持って来る、大食をしないのを外見でも考へた人かどうか知らぬが、其中にある馬鈴薯ばかり取て、本元の肉を取らぬ者などがある、これは謙遜から来て居るか或は外見から来て居るか知らぬが、ツマリ矢張縮み上つた結果であらうと思ふ、さう云ふ事は餘り堅苦しく考へないで、一通りの所謂常識を以て考へて行けば大概宜しいのである、何もそれ程

心配するには及ばない

### 食事後の注意

洋食に就て不思議に感ずるのは(日本食にもあるけれども)食事が済めば直に歸ると云ふ事である、これは東京邊では近來殆ど見なくなつたが、大阪では確かにある、特別に今日は居て下さいと言つたら知らぬこと、さうでなければ食て仕舞ふと直に歸る、全體どう云ふ趣意であるか解らない、晝食でも晩餐でも食事中緩々と談話をし、又食事が済でからも姑らく打寛いで談話をするのが其要を催す趣意である、唯食ふ一方に集るのではない、それを食

事が済めば吾事畢れりとして直に立つと云ふのは實に不體裁極まる話で、殊にこれが日本人同志ならばまだしもの事、若も西洋人と打交つた時分に斯う云ふ事をしやうものならば、其西洋人が腹を立つか心配するか何方かである、彼の人は失敬な人だ、食事をすると直に歸つたと云ふて腹を立つか、左もなければ何うも何か無禮を爲はしまいか、無禮をした爲めに彼の人が不平を起して歸つたのではあるまいかと心配するのである、それは其筈で歐米各國では、決して食事が済んだからと云つて、サツサと歸るやうな風習はない、停車場の食事場へでも行て物を食ふ場合には、愚圖々々して居れば汽車が出るから、大急ぎで食つて立つと云ふことも

あるが、苟くも人の家に招かれて、或は集會の席で、物を食つて直に歸ると云ふ事が禮儀に適ふ筈がない、是れも日本流に考へても解る話で日本流でも飯を食つて直に歸るものではない、萬一直に歸らなければならぬと云ふ場合に何と云ふて歸る、どうも食へ立て相済みませぬとか何とか云て失禮を謝して歸るではないか、西洋食だからとて食て直に歸つて宜いものだと心得て居るのは、大なる間違ひだ、何うもこれも不案内から起ることではあらうが、内外人交際をする場合などには、尙更注意しなければなるまい

西洋眞似損ひ

近來西洋の眞似することが、流行するにつれ、眞似損なひが甚だ多い、これは西洋の出来損なひを眞似するのである、例へば殊更に帽子を横に被つて見たり、チエツキを取て襟飾を振下げて見たり、長い太いステツキなぞを携へて見たり、何や斯や色々眞似損なひを造て居る、コソナことは歐米にて見當らぬでもないが、最下等の人のすることである、



亞米利加は随分粗雑な國であるから、色々百鬼夜行を見る様な場

合もあるが、歐洲大陸殊は英吉利佛蘭西等に至ては最下等の者でなければ決してソソナ無作法の事はない、然るに日本の紳士が衣服にしても靴にしても勝手次第の風をして居るのは、詰り歐米人の出来損を眞似て居るのである、歐米人の東洋に来て居る者は、大概は本國に居るやうに儀式張るには及ばぬ何うでも宜しいと云ふやうに心得て居るらしい、又在留人の内には本國に居ては上流社會に交際の出来ぬやうな人もあるから、自然體裁と云ふことに餘り重きを置かぬ、それと今一ツは氣候が違つて居る、暑寒とも違つて居るから萬事本國に居る様には出来ぬ事情もある、ツマリさう云い事情からして、歐米各國に居る者と比較したる目から

見れば、非常に無作法な形をして居る、此無作法を以て西洋風だと心得たのが、即ち西洋真似損を遣て居る連中の根本的誤解である、其真似損の實例に就ては、なか／＼枚擧に遑わらずだ、逆も悉く述ぶる譯には行かない、兎に角下等社會の爲體を西洋人の真相と心得て居る者が多い、切角當人は西洋風を真似た積りで意氣揚々として居ても、上等社會の西洋人や西洋を見たことある者の目から見れば抱腹絶倒の至りで、又一方から云へば甚だ惘然の有様で、逆も／＼紳士な姿／＼見られたものでない、故に極く几帳面には出来ずとも、責めて其出来損を真似せぬやうに注意するが宜しい……又西洋人のする事を真似損つて、下等社會の風を真

似たり何かして不體裁を現はして居るのがあると同時に、反對に無理に西洋丸出を遣たがつて居る弊もある、例は歐羅巴では、詰くとは往かないが、多くの國では男子は日傘を翳さない、決して翳す處がないではないが、併し倫敦とか巴里とか伯林とか云やうな大都會では翳さないと云ふのは實は翳す必要がないのである、歐米と云つても廣いから一概には言へぬが、歐羅巴邊の諸大國の氣候では、實は日傘を翳さぬでも熱くはない、第一着物が冬と夏の服ばかりである、けれども此夏の服は、日本では春秋にしか着られぬ、逆も夏の間に着て居られるものぢやない、故に先づ夏冬の二服と云つても宜しい、向ふでは冬と夏が長くつて春秋の間が短

かい、其短かい春秋に着る衣服もあるが、此衣服を着る人は、極く正しい着物を着ると云ふやうな人の話で、普通の者は夏も冬も同じ着物で通せば通せるのである、夏も烈しく熱くなければ冬も烈しく寒くない、尤も段々北に寄るに従て寒い處もあるが、大體同じ衣服で通せるのである、と云ふやうな工合であるから、日傘などは女子は翳すが男子は翳さぬで宜しい、所が夫を日本に居つて眞似をして、夏の炎天で堪らぬ時に、無理に日傘を翳さずに汗を拭き、往來をして居るものもある、歐羅巴では氣候の關係上翳さぬのであるのに、夫を無理に苦しんで西洋の眞似をして居る、實に馬鹿氣な話だ、國の氣候が違つて居る以上は、幾ら歐羅

巴の眞似をすると云ふた所が、ソナナ必要はない、歐羅巴人でも日本へ来て居れば、彼等の習慣上日傘を翳さぬ者もあるけれども、併しながら多くの者は矢張翳して居る、是等の事は其土地の氣候に因ること、決して無理に眞似るには及ばぬ……寒さに至ても其通りだ、日本では逆も外套を着ずには凌げない處が多い、故に冬は外套を用ひなければならぬのに、無理に瘦我慢をして外套を着ないで居たりすると云ふのも、甚だ馬鹿氣な話だ、其寒さに應じたものを着るが宜しい、と云つて又或る上流社會に行はれるやうに、無闇に毛皮を附けたり、或は大きい玉羅紗などの長い外套を着て、まるで夜具を着て歩くやうな風をして見たり何か

する、これは随分寒い時分に馬車や人力車に乗つて、身體を動かさぬと云ふやうな人は、多少厚いものも着なければならぬが、併しなから大體に於て日本の氣候は、極く北の北海道へでも行けば格別、然らざればソナに厚い外套や毛皮などを附けて着るには及ばぬ、是れも亦必要と云ふよりは外見張ると云ふ方から來て居るのであらうが、ツマリ其邊は幾ら西洋の眞似をしようと云つた所が、其土地に應じ其氣候に應じた風を爲なければならぬ、是れも矢張西洋の眞似損の一寸であるから、少し改めて適當の所に止めるが、宜からうと思ふ

帽子の事

帽子のことに就ては、日本では色々な帽子を被つて居る、土耳其帽子もあれば鳥打帽子もあり、中には何處の國で被る帽子だか奇妙な帽子もあつて、實に千差萬別である、然るに歐米各國就中英吉利とか佛蘭西とか云ふ處では何う云ふ帽子が通例のものであるかと云へば、夫は日本で禮帽と稱して居るやうな例の高帽子である、仕立屋の番頭でも荒物屋の主人でも、皆この高帽子である、其他旅行をする時とか何とか云ふ場合には、今日日本で被つて居る低い帽子である、又汽車の中などでは鳥打帽子も被る、所が

日本では何か儀式立たた時に例の高帽子を被ると云ふことになつて、  
 稀に用ひるのである、それ故に之を禮帽と稱して居る位だが、  
 歐羅巴では通例に用ひて居る、夫を取違へて此略帽は立派なる帽  
 子である云ふやうに心得て居るのは間違だ、併しながら日本で  
 は逆も例の高帽子を、常に被つて居ることは出来な、且シ出来  
 た所が極めて不經濟のものであるから、之を勸める譯ではないが、  
 洋服でも着る人は、これは歐米では通例に被る帽子であつて、餘  
 は略儀に用ひるものであると云ふことを知て居て貰ひたい  
 又帽子の事に就て、日本は近頃諸事歐米に近寄つて來たが、茲に大に  
 反對して居る一事がある。それは何かと云へば帽子を持つと持た

ぬと云ふことである、歐米では人を訪問する時に座敷まで其帽子  
 を持つて行く、蝙蝠傘や杖は入口に置くが、帽子だけは必ず其主人  
 に面會する所まで持つて行き、而して大概手に持て居て話をする、  
 食事か何かのやうな時は別であるが、普通の訪問には左様である、  
 所が日本では之に反して必ず帽子は入口に置やうに心得て居る、  
 尤も日本造の家は西洋館とは違ふから、一切萬事西洋風には行か  
 ぬのみか、日本造りの家には帽子を持つて入るは却て不都合の様で  
 あるが、併し西洋の習慣は左様であると云ふことは、西洋人との  
 交際や西洋館に出入する人は心得て置く方が宜からう



靴とシヤツ

歐米各國では、通例の場合に於ては餘所行だの平常着だのと云ふ區別が嚴重でない、宅で着て居る着物を外へ着て出ると云ふやうな場合が多い、何か特に注意する時は無論着替もする、又宅で仕事をする爲めに略服で居る時には、外へ出る爲めに着替をする事云ふやうなこともあるが、併しながら日本程に外へ出るには必ず着替をする事云ふやうな風はない、ないが最も注意するものは靴とシヤツである、シヤツは倫動邊のやうな煙の多い處では、何遍も着替なければならぬさうだが、夫は煙の爲めでもあらうが、煙

の爲めでなくしても、靴の處に於てもシヤツは眞白なものを着用する、能く注意する人は日に二度も三度も着替へる夫れ程でなくとも毎日一度か長くとも一週間に二遍や三遍は着替へる、靴も其通りで毎朝能く磨いた靴を穿いて居る、少しでも汚れると磨直すか又は穿替へると云ふやうに吟味して居る、着るものは一通りのものでも、靴とシヤツは餘程注意して居る、それであるから何うも如何なる高い代價を拂つて、立派な洋服を着やうが、靴とシヤツが不體裁であつては、何うも體裁を爲さないものである、所が日本の様子をみると云ふと、随分高い金を拂つたらうと思ふ洋服を着て居りつゝ、其シヤツを見れば垢染みて居たり、又袖口から垢

染たるフロンネルやメリヤスなどの見ゆる様であつたり靴も汚れて居たり、誠に靴とシャツに注意が到らぬやうである、甚しきに至るとシャツなどは亞米利加邊から輸入すると見ゆるが、護膜を引いた洗濯をしないで拭けば汚れが取れるなど云ふ、妙な厚紙で拵へたやうなものを、袖口や襟に用ひたり、又胸の所だけシャツらしい者を用ひてアトは莫大小やフロンネルを着て居つたり、どうも不體裁が多い、是はジャケットやモーロングコートでなく、立派なフロッシコートを着て高帽子などを被つて居る人でも其シャツを見ると云ふと、汚れたシャツを着て居るか、或は汚れたにも何もシャツを着ない、例の莫大小かフラチル見たやうなものを

着て居て、襟の所と胸の所だけ護膜引のヒカクした物などを用ひて誤魔化して居り、其靴を見れば赤靴やらブツクやら種々なものを穿いて居る、又靴は歐羅巴では普通鈕釦で締めるのを穿いて居る、運動や散歩には紐で締めるのを用ひると云ふやうな風がある、此鈕釦靴は日本では随分難儀するであらう、靴を取らなければならぬ場合は多いから、鈕釦を一ツづゝ掛けて居るのは大變だ、紐にしても其通り、何うも百足の足に靴を穿かせるやうなものであるから、是れは強て遣た所が日本には不適當であらうと思ふが、兎に角シャツと靴は洋服には大切のものであるから、幾ら宜い着物を着やうが、靴とシャツが悪くては迎も體裁を爲さないのだ、

是れは歐羅巴人の目から見ても、甚だ妙に見ゆるのであらうが、日本人の目からも見苦しい、全體が西洋の眞似である以上は、餘り西洋で爲ないやうな事はせぬが宜からう

### 婚禮と葬式

婚禮と葬式に就ては、文明國と野蠻國とに拘はらず、其儀式千差萬別のものである、故にこれは決して西洋風を眞似るにも及ばぬ、又眞似やうとした所が、西洋にも種々雑多な風習があつて一様でない、殊に歐米各國には宗旨の力が一時盛であつた名残として、随分種々な入組んだ關係もある、婚禮にしても葬式にしても宗旨

の關係を持つことが多い、尤も今日では寺院で婚禮するのみを以て正式の婚禮とすると云ふやうなとはなくなつて來たけれども、兎に角以前は寺院で婚禮の儀式を擧げることがを以て、正當の婚禮と見る位で、區役所の届などは二の次に置いた程のことであつた、葬式に於ても亦然りであつたが、今日は追々宗教の力の衰へて來たのと、同時に國法學の議論も盛になつて來て、大に其事情を異にして居る、居るけれども從來の慣習上、其儀式作法に至ては宗旨の關係が非常に多い  
日本では葬式には宗旨上の關係が及んで居るけれども、婚禮には及んで居らぬ、尤も深く詮議すれば多少婚禮にも宗旨の關係の及

んで居るかに疑はれる場合が無きにしも非ずとは思ふけれども、それは茲に論ずるの必要はない、而して歐米各國に於て婚禮葬式の體裁の千差萬別なると同様に、日本でも各地到る所種々雑多の關係があつて一様でない、これは無論宗旨の外の關係からも來ることである、故に此千差萬別なるものを、何れを正當のものとして、一様に爲やうなと云ふ論は立てられない、ツマリ從來の慣習中甚しき悪弊は時勢に伴ふて改むるの必要あれども、大體は矢張千差萬別の儘で宜しい

婚禮葬式は千差萬別のまま、で宜しいと云つたところで、國粹保存論を唱へるでも何でもない、年を経るに従ひ、又交通の便が開け

るに従て、其儀式に種々の變化を興へるに違ひない、現に維新前と今日と比較して見れば、皆孰れも變化を來して居る、故に漸次に各地様々の習慣因襲と云ふものは變化するであらうが、其變化は自然に任せて宜しい、決して急に西洋風を學ぶにも及ばぬ、又各地の因襲を故なく改めるにも及ばぬ、冠婚葬祭は人事の大禮なりとて大駭をする程の事であるから、尙更妄りに之を一様に改むる様な企をせぬ方が宜しからう、それ故に都會にしても田舎にしても、又當大阪の如きにしても、随分婚禮にも葬式にも奇妙なる風習があるが、これは唯甲の地方に行はれるのを標準として見れば、乙の地方が奇妙に見ゆるものであつて、其奇妙なる所よ

り更に他を見れば又同じく奇妙に見ゆる、結局何れを宜しとも定  
めがたきもの故、俄かに改める必要がないと思ふ、併し葬式に就  
ては、其宗教上の因襲には關係ないが、葬式をする者及び會葬す  
る者の心得には改良する方が宜からうと思ふことが多い

### 會葬者の注意

第一葬式は佛葬にしても神葬にしても、多くの人が棺の後に附て  
送葬をする、一時は馬車や人力車で行くことが流行したこともあ  
つたが、近頃では徒歩して行くのが正式であると思ふことは、一  
般に知れ渡つたやうである、これは外國でもさうである、絶對的

に馬車を用ひないと云ふではないが、先づ徒歩をするのが正式と  
してある、で日本でも馬車や人力車  
に乗た所が深く咎められもせぬが、  
併し徒歩を正式と認めて居るは至極  
宜しからう……然るに其葬式の後に  
附て行く人を見ると、煙草を喫んで  
行く人もある、又面白さうに話をし  
て行く人もある、これすら既に不體  
裁と思ふのに、中には猥褻極まる話  
などをして笑ひ興じて行く人もある、これはマサカ葬式に參列し



た人ではあるまい、偶然に其處の行列に出會したのであらうと思ふとさうでない、矢張葬式に参列する人だ、哀を表すると云つて支那朝鮮流に殊更に泣いて行くにも及ぶまいが、併しながら多少静肅するだけのことはしなければならぬ、切角葬式に参列しながら、見物遊山に行くやうな體裁の見ゆるのは、第一其死者の家に對しても失禮であらうが、一般の人の目から見ても不體裁極まる……又葬式を見物する人や葬式に出遇ふた人にも少し注意して貰ひたいことがある、一般の人は何も葬式に参會するのではないから、痛痒關しない何方でも宜しいと云ふやうなもの、葬式の行列が前を通るときに笑ひ興じたり大きな聲を出して話をするに

は及ぶまい……歐洲大陸の中には實に立派なる國もある葬式は如何なる人の葬式であらうとも、之に出逢ふ者は必らず帽子を取て禮をする、人足でも辻馬車の御者でも必らず帽子を取て禮をする、或は虚禮と言は言はうが、風習としては甚だ嘉すべし風習である、日本でもさう云ふことをするのは宜からうと思ふが、夫までに至らずとも責めて少しく静にする位の心掛があつても宜からう……又葬式に出逢ふた人が遠慮なく人力車を駆飛ばし、それが爲めに葬式の行列が脇に避けなければならぬと云ふともある、或は行列の中を切られて大迷惑すると云ふやうなともある、何も餘り宜しい舉動とも思はれない、大阪などは道が狭いから據るない

と云ふやうな迷口上は幾らもあるが、併しながら多少葬式に對して敬禮を表しやうと云ふ心掛があるならば、姑らく車を脇に寄せても宜からうし、又其處が行けなければ他道を通つても宜からう又據るなく行列を切て駆抜けるにしても少しは注意の仕方もあるらう、全體コンナことは警察官が少し注意して呉れても宜からうと思ふ、人を排て葬式を通すとか、人力車の疾走を止むるとか、それ等の注意は警察官は當然なすべし筈ではないか

### 葬式の弊風

葬式の寺院なり式場なりに参るつた時に、會葬者が何うして居る

か、神主が誄詞を讀む、僧侶がお經を讀む場合に、少しは静肅にならぬでもないが、矢張相變らず煙草を喫み談話をして居ると云ふ風がある、切角其葬式に參會しながら餘り酷い、暫時のことであるから靜肅に其場を濟したら何うであらうか、尤も此事に就ては葬式に行く人ばかりぢやない、葬式をする方でも大間違を遺て居ることもある、何時頃から始まつた事か知らないけれども、お經を讀み誄詞を讀むと云ふ場所へ參會した人に向つて、茶を出し菓子を出し、煙草盆が置いてあると云ふやうなこともある、これは何う云ふ意味から來るか、參會した人に敬禮を表すると云ふ意味かは知らないが、歐米であれば芝居を観るにさへ煙草を喫む者は

一人もない、禮服を着用して靜肅に見物して居る場所さへある、  
 禮服を着用しないにした處が、誰一人談話をする者もなければ煙  
 草を喫む者もない、若しあつたならば非常に輿論の攻撃を受けて、  
 其場所に居懸れるものではない、況や葬式だ、葬式は見物に行たの  
 とは違ふ、見物に行てさへ右様であるのに、其處に哀を表する  
 爲めに參會して居ながら、菓子を食つたり茶を喫んだり雑談をす  
 ると云ふに至ては、密席に行たよりも酷い、これは參會者の方で  
 も注意し、又葬式をする方でも注意して、以來さう云ふ事は止め  
 た方が宜からうと思ふ  
 席でに葬式の事に就て述べて置きたいのは、競争して花を贈つた

り放鳥籠を贈つたりすると云ふことである、東京邊では殊にさう  
 云ふ風は多かつたが近來は又之を斷ねると云ふ風が流行するやう  
 になつて來た、至極宜しい、實に馬鹿氣な話だ、花の行列をして  
 見たり、放鳥籠を擔いで行て見たりした所が何の爲めになるか、  
 哀を表する方法にはならない、宛然か祭のやうにしか見ぬない、  
 加ふるに其費用も尠なからぬことである、無益と云へば無益、虚  
 飾と云へば虚飾、之を改める方に段々傾いて來たのは誠に悦ばし  
 いことである……去りながら今一步進んで改めたいと思ふとは、  
 例の香奠と贈物のことである、これは古來の習慣で、今俄に何う  
 すると云ふことの出來ない事情もあるに相違ない、相違ないけれ



とも香奠を贈る、又は物品を贈る、それが何うなるかと云へば、四十九日とか百ヶ日とか云ふ時に、假頭茶袱紗などになつて返つて来ると云ふ順序である、何の事か譯が解らない、死者の爲に哀を表し敬禮を表する爲めに贈つたものであるならば、受ッ放しで宜しい、禮は言ふべき筈だが、それに相當する物品を贈つたり又之を受取りする理由はない、コンナ習慣は無論歐米各國には見ない、日本に限る、殊に近來は仰山な假頭や立派な袱紗などを贈る競争もある、幾ら仰山でも立派でも其假頭も袱紗も食ふにも使ふにも困る場合がある、沙汰の限りだ、幸に花や放鳥籠を止め掛けて来たから、序でに香奠を止めるか、香奠が止まらなければ、

返禮として配るものを止めるか、兎に角之を改めないで、種々の弊害が増長する、去りながら一人二人で之を改めやうと云つた所が、社會の風習に戻るとか何とか云ふかも知らぬが、さう云ふ虞があるならば香奠類を一切斷わるが宜しい、斷わつて貰はぬ以上は返禮をする義務がないから夫で済むだらう

### 喪章の事

又近來葬式に參會する人が、喪の表章を附けることが間々ある、これは無論西洋の眞似であるが、西洋では親戚でなければ、帽子や腕に喪の表章を附けはしない、大概通例の會葬人と云ふもの

は、黒い手袋ぐらゐは用ふる者もあるが、これも必ずとは言へぬ、  
 兎に角其死者の積合の者であつて、喪に服すると云ふ位の人は無  
 論喪の表章を附けるが、其他の者は附けはしない、尤も極く表立  
 た儀式には附ける者があるが、それは別段の話で、現に日本に於  
 ても宮中喪を仰出された時には、参内する者は常に喪の表章を附  
 けねばならぬ、又大なる喪に出會ふ時は、國中一般に喪の表章を  
 附る事もある、即ち先般英照皇太后の崩御せられた時もさうであ  
 つた、其他普通會葬の場合には、歐米各國悉く同様ではないが、  
 通例は喪の表章を附けはしない、現に喪に服する者でなければ附  
 けない、其代りに喪に服する者は、長期間之を附けて居る、殊に

兩親、妻などの爲めには随分長く表章を附けて居る、而かも帽子  
 に附けて居る布片が大層幅が廣い、帽子にも腕にも附け、又其の  
 位の時には名刺にも手紙の状袋にも中の紙にも、皆黒い縁を附  
 けて居るのみならず、夫に死なれたる婦人などは普通の帽子を被  
 らずして長さ黒布を以て頭部を包み終身黒衣を着居る風である、  
 又國中の大喪に國民一般が服して居る時などにも單に帽子や腕に  
 喪の表章を附け居るばかりでない、官廳の書附などまで矢張黒  
 い縁を附けて用ふる國もある、去りながら普通會葬の場合には喪  
 に服する程の者でなければ決して喪の表章を附けはしない、然る  
 に日本では親族の關係から見れば縁も因縁もない、又其葬式は特

別の場合でも特別の人の葬式でもないのに、帽子にも腕にも喪の表章を付けて行く人がある、之を附けたが爲めに失禮になりもしまいが、何うも少し喪の表し方が違つて居るやうに思ふ、喪に服する人の外は矢張西洋風に表章を止めた方が宜からう……又葬式に參會する人に、燕尾服を用ひて居る人も間々見ゆるが、これは随分場合に依ては歐米でも用ひないではない、併し通常の場合にはフロツクコートである、大禮服や小禮服を用ひるときは場合が違ふ、眞逆に日本で大禮服を着る人もないけれども、小禮服即ち燕尾服を用ひて、而かも夫に喪の表章を附けて行て居る人は珍らしくない、これは西洋風を眞似て其場合を誤つて居るのであらう、

成らうことなら西洋の眞似序でに、矢張西洋で遣るやうにフロツクコートを用ひる方が宜しい、葬式に參會しながら、色々の雑談をなし煙草を喫で行く人があるかと思へば、餘りに鄭重過ぎて體裁を失する人もある、結局皆な不案内から來ることが多いであらうが多少注意して貰ひたい

### 名刺の折方

名刺の折方に就て、或る人より何うするが正當であるか、西洋では新年とか新婚とか用辭を述るとか云ふ場合に相違ある様子だが教へてくれよとの依頼あり、でたため記者に取りては光榮の至り

であるが、併し記者はソツナに博識ではない、唯だ思ひ出でたるまゝにホンのでたらめを列べて、斯くありては如何と世人に御相談するまでの事であるから、質問に答へるなどは本意でない、去りながら多少記憶し居ることは述べても差支ないから、左に記憶のまゝを述べて見やう

名刺を折ると云ふことは、人に面會を求むる時にすることではない、例へば何かの挨拶か答禮に往て名刺を置いて歸る時にする事である、尤も面會を求むる爲めに往つたにしても、不在か差支かで面會が出来ずして歸る時に折る事もあるが、面會を求めて面會の出来る場合には決して折りはしない、夫れを間違た種々の奇談があ

る、或る人が名刺を折て取次に渡した、主人は之を見て、名刺を置いて歸つたこと、信じて居たところが、客は何時までも入口に待て居る、不思議だから取次に聞かせる面會したいと云ふ、それで始めて間違が分かつて面會したと云ふこともある、又反對に名刺を折らずして出したから、面會することと思ふて、客間に通さんどせしに、客はトウに歸つて居らない、是れも間違である云ふことが分つて、一笑したと云ふこともある、此七月から内地雜居になり、外國人との交際も頻繁になるとすれば、此邊も注意が必要であらう、それから名刺の折り方の事であるが、新年には何うするとか、新婚には何うするとか、又用辭には何うするとか、即ち

冠婚葬祭目出たき不自出たきで、折り方が違ふと云ふことは記者  
 不學にして知らない、ソナナことは歐米各國の内にはあるかも知  
 らんが、あつた所で几帳面に行はれて居る事柄ではあるまい、其  
 證據には人によつて色々な折り方をして居る、又同じ人で同じ場  
 合に名刺を送越すにも、其時々色々な折り方をして居る、で何か  
 本でも調べたなら、書いてあるかも知らぬが、實際は折り方に縁  
 喜も何もない様である、是れが或る人の質問に就て記憶のまゝを  
 述べたのであるが、尙は名刺の事に就ては、今少し云ひたいこと  
 があるけれどもソレハ他日にしやう

貧乏ばなし

四百四病の病より貧乏は辛いものはない、なご、俗には云ふけれ  
 ども、眞に貧乏は辛いかわらぬ、世間には貧乏を鼻にか  
 けて居る人は幾らもある、吾々は貧乏だからと云つて威張つて居  
 様な人は何所の隅にも居るではないか、其内には眞の貧乏人もあ  
 れば、嘘の貧乏人もあるが、兎に角貧乏は世間に對して耻しくも  
 何んともない様子であるから、此連中には貧乏は四百四病より辛  
 いどころか、風邪よりも辛くはあるまい、窮しては益す固かるべ  
 し、なご、云つて節義を守らんとすればこそ、貧乏は随分辛から

う、昔しの武士は食はねど高楊枝など、氣節を重んじたから、其  
 心中も察せらるゝが、貧乏を鼻にかけて威張られる様では辛くは  
 あるまい、加ふるに近來は貧乏は營業の資本となる様な風もある、  
 彼もあまり貧乏だから役人にでもしてやらうとか、彼も貧乏だか  
 ら不體裁も恕してやるサ、など、云ふことは毎度聞くところの  
 評判であるのみか、貧乏を鼻にかける連中は、人から借金するこ  
 とは勿論、借りた金を返さぬことも平氣で居る、然らば則ち、  
 貧乏の招牌で有らゆる不徳義の公許を得た様なものではないか、  
 コンナことであるから借金山の如き人は、彼は豪傑だなど、云は  
 れて居る……見たまへ今の政事家は大概貧乏だ、もし貧乏でない

なら、政事家になつた爲めに貧乏になる、ソコで貧乏と政事家は  
 離るべからざる關係の様に見られて居るが、其貧乏政事家は何を  
 するか、議論は喧しいが、變説することも、内々金を取ることも、  
 平氣だと云ふではないが、先頃の獵官騒ぎでも其の通りだ、役人  
 になりたがる有様は、宛然餓ゑたる豺狼に一櫛の肉を見せた様で  
 あつた、最初は少々氣耻かしくでもあつたか、政見を實行する爲  
 めだの何のと云つて居たが、後には貧乏ゆゑに仕方がないと白状  
 した者もあつた、政事家は一例に過ぎないが、政事家でなくても、  
 今日の社會には、貧乏を鼻にかけて横行する者が多い  
 歐米の政事家にも貧乏人は澤山ある、英國などは別ものだが、其

他の國には貧乏政事は随分あるに違ひないが、併し其貧乏の度合は日本の貧乏政事家とは違ふ、マサカ政事営業でなければ飯が食へないと言ふ連中は少ない、然るに日本の貧乏政事家は之と正反對の様である、又政事家以外の貧乏人も澤山彼國にあるが、此貧乏人はとても貧乏を鼻にかけて横行する様な譯には往かない、夫が爲めには社會黨など云ふ様な恐ろしき者も生じて居るが、兎に角貧乏を營業の資本にすることは出来ない様である、日本は幾ら進歩したと云つたところが貧乏人はまだ減少する譯にはなるまいから、大概の處までは貧乏人だからと云つて、擯斥すべき次第でないのみならず、貧乏人の方に却て豪傑があるかも

知れないが、貧乏を鼻にかけることだけは休めて貰ひたい貧乏して鈍したり、窮して濫したりするは、小人の事であると昔しから云ふから、貧乏したならば一層其志を堅固にせねばならぬ、其志を堅固にすれば、貧乏は随分辛いものに相違ない、併し其辛いのが即ち奮發心の基でもあれば、獨立心の基でもある、貧乏人から大學者を生じたり、大分限者大政事家の出来たりするものも、畢竟此理由から起ることであるが、貧乏を鼻にかけて不徳義の公許を得たる様な量見では、實に社會の厄介ものである、壯士など云ふものは數年來世間騒がしのもので、最も其弊の甚だしきものであるが、壯士でなくとも、立派な招牌を掛けて居る政事家でも

實業者でも、貧乏を鼻にかけて不徳義を働かんとする者は實に多い、而して社會は深く之を咎めずして、却て恕してやる様な風のあるのは、不可思議千萬ではあるまいか、富めりとして誇るに足らず、貧なりとして卑しむものでないことは、明白の道理であるから、決して貧乏人を思ひでも嫌ふでもないが、貧乏を鼻にかけて横行する者が多くては、國の發達に大害があらうと思はれる  
コンナ屁理屈を云ふは、決してでたらめ記者の本意でないが、思ひ出でたから、例外として貧乏ばなしをするのである

### 内外人の交際 (一)

今年から新條約が實施せられて内地雜居の出來る様になる、澤山の外國人が俄に來やうとも思はれないが、兎に角今よりは内外人の交際の範圍が擴まると云ふことは疑ひない、然るに是れは如何にして交際するか、若し内外人の交際親密なることを得ずして、居留地に許り外國人が團結つて居る様では、假令居留地が市に編入せられて、一般の市區の中に這入つたとした所が、どうも水の中に油があると云ふやうな有様になりはしないか、内外人互に歩み合つて交際を親密にし、内外人たることを相忘れると云ふやうでなければ、色々な弊害が起らうと思ふ  
内外人の個人間の交際と云ふものに就て、今日見る所では遺憾に



思はれることが多い、お互に言葉の通ずると通じないに依て關係も違ふが、併し何うも日本人の外國人に出逢ふと云ふことに就ては、一種不思議なことがある、日本人同志の交際に嘗て無きことがある、それは何かと云へば、俄かに氣が變になるやうに見ゆる事である、内國人に對して平常決して言はざる事を外國人に言つて見たり、又平常言ふ事を殊更に言はないで見たり、何やら虚心平氣で談話をするのでなくして、氣が變つたやうな妙な工合に見ゆる、對外硬ななどを唱ふる論者には却て之が多い、故に通辯でも爲てやらうものなら、何うも餘り突飛な餘り不思議な説があつて、通辯も翻譯もされないといふやうな場合がある、但し外國

語で直接に談話の出来るやうな日本人は、彼等の氣合も知て居るからさう云ふ事はないのであるが、通辯を頼つて外國人と話を爲たり、又は外國人の少々出来る日本語を頼みにして話をしたりする場合には、夫が多い、一例を擧げて言へば、通辯に依て話をする場合には、少しく政治家めいた人などは、忽ち東洋の形勢などを云ふことを持出す、何うも場合も違へば相手の人の位置も違つて居るのに、突然東洋の形勢を尋ねられるものぢやない、さうかと思ふと又雑談の積りか何うも聴くに忍びざることをなを言ふ、平常其人の癖がさうであるかと云へば、此人は誰なり彼なり捉へて東洋の形勢を談ずると云ふやうな人でもない、又誰にも彼にも言ふ

に忍びざるやうな事を云ふ人でもない、併し通辯に依て外國人と話をするか、又は外國人の少々出来る日本語を頼みとして話をす  
る機には夫れが出てくる、又言葉としても、横濱邊で遣つて居る  
妙な日本語、何處の言葉やら譯の解らぬ言葉を使用する人もある、  
それまでには至らずとも、兎に角外國人が出来損つて遣て居る日  
本語を遣ふ人は随分多い、何故普通の日本語を遣はぬか、第一之が  
不審であるが、而して其話と云へば今言ふ通り途方途轍もない縁  
も由緒もない事などを言つて居る、一口に言へば外國人の顔を見  
て少し氣が變になる、マサか氣が違ふではあるまいが、何うやら氣  
に掛つて、平常の態度を失ふやうに見ゆる、ソノ事では往ない

内 外 人 の 交 際 (三)

交際は無言で出来る者でないから、言語は大切のものであるが、  
去とて人間同志で話をするのに、通辯で話をしやうが、對手が日  
本語を遣へば尙更少しも氣に掛けるには及ばぬ、日本人同志の通  
り談話するが宜しい、唯彼と我と風俗を異にして居るから、彼の  
氣に障る事や、又は彼が妙に感ずると云ふやうな事は話さぬ方が  
宜しいだけの事である、西洋の婦人に向て、乳の話をしたり、裸體  
の話などをして、夫が爲めに婦人は逃出したたり怒つたりしたと云  
ふ奇談は随分あるが、是れは事情が解らぬから起ることだ、が兎

に角相手の嫌ふとは言はぬ方が宜しい、是れは日本人同志でも其通りである、其等は注意しなければならぬが、其他に於ては日本人同志の交際と違へるには及ばない、全體日本人は外國人と交際する場合に、何となく臆して見ゆる、男子にしても女子にしても左様である、是れは少しく理由があると思ふ、マア衣服の一端に就ても西洋を真似て居る故に、斯う云ふ風は西洋人に笑はれはしまいか、可笑くはあるまいかと云ふやうな氣が、本家本元の西洋人に對すると起るかと思ふ、夫が病根であらう、支那人などの様子を見ると、少しく西洋の真似もして居らなければ、又真似をする考もない、故に平氣の平左衛門で

ある、就中女子などに至つては不思議だ、日本の女子は日本人に逢つてさへ、成丈け控へ目に成丈け物も多く言はぬやうに、誠に内端すぎるやうである、外國人へ向つては尙ほ更甚しい、所ろが支那の婦人は世間に交際も少ないと言ひつゝ、何う云ふ譯であるか外國人に向つては少しも臆する風がない、婦人が其の位であるから、男子は勿論である、是れは畢竟彼等が真似をする考がないからであつて、日本人は相手の真似をするから、師匠の前で藝をするやうなもので、何うも臆すると云ふ風があるのではないか、是れは止を得ぬと云へば止を得ぬやうな事情だが、併しソレナことでは宜しくない、成程日本は西洋の真似をする、衣服にし

ても食事にしても、家屋にしても何にしても斯にしても多くは西洋人の真似をするから、西洋人に對しては随分差かしいやうな場合もありはしやうが、併しながら是れは決してソソナに忍るゝに足らぬ、西洋でも、日本の便所に使用つて居つた塗壁を座敷の真中へ飾つて見たり、甚しきは草履を暖爐の脇の壁に下げて置いて見たり、其他何うも不思議奇態なことがある、日本でも西洋の便器に飯を盛て御馳走したと云ふ奇談もあつたが、此頃でも類似な事を遣り兼ねもしまい、けれども西洋でも遣て居る、互ひに知らぬ中はさう云ふことは聞かぬ、又現に今日使用して居る香爐だの、茶器だの、花瓶だのと云ふものの中には、支那や朝鮮から

來た種々なものがある、唾を吐くものを遣つて見たり、便器を遣つて見たり、それは言語同斷だと云ふ説もある、けれども年來遣つて居るから、不潔なものとも思はない、却つて之を珍重して居る、本元の支那人朝鮮人の目から見れば随分妙な物もあらう、是と同じに西洋の真似をして居るから、不思議な事や妙な事もあらう、あつても互ひにまた、それ程差加しく思ふには及ばぬ、尤とも成るべくソソナ事をせぬやうに注意するは云ふまでもない必要なこと、畢竟其老婆心があれば此長々して注意談もなす譯なれども、去りながら如何に外國の文物制度を真似るからと云つて始終其文物制度の本元へ對して臆すると云ふやうな事では、國と

國との交際でも個人間の交際でも對等に出來るものぢやない、故  
 に其臆病心は斷然捨て、貰ひたい  
 物は習ふより慣れると云ふことがある、慣るゝに従て改良を加  
 へることも出來、外國人との交際も年を経るに従て段々改まつて  
 來るであらう、併しながら近々内地雜居が始まるとして、内外人  
 同等の位置に立つとすれば、此内外人の公私の間の交際と云ふも  
 のも多くなつて來、無論商賣上の取引に至ても多くなつて來るで  
 あらう、法律制度は外國人は外國人として見なければならぬ場合  
 もあり、又所謂敵愾心の上からは外國人を外國人として見なければ  
 ならぬ場合もあるが、併し普通の交際上には、外國人だの内國

人だのと區別をして居るやうでは甚だ狭い、却て外國人は内地の  
 事情にも通せず、種々不便を感じて居ると云ふやうな點もあらう  
 から、内國人よりも幾らか勞つて遣るが宜い、例へば警察官にし  
 ても其通り、警察官が何故に外國語を學ばねばならぬかと云へば  
 警察事務の周到を期するが爲めに必要であると云ふことは無論  
 あるが、其議論は別としても、外國人の如き遠來の者は、多少世  
 話を遣らなければならぬ、夫は歐米各國を旅行しても其通り  
 である、外國人は内國人よりは、大目に見て貰ふたり、好く取扱は  
 れたり、即ち好遇されるのである、故に外國人を多少好く扱ふと  
 か、便利を與へて遣るとか云ふことこそあるべき筈にて、外國人

を疎外したり、又は外國人に對して臆病心を起す様にては、トナ  
も親密なる交際が出来ない、親密なる交際が出来なければ、總て  
の事に就て不便を感じ、相互の利益を計る事も出来ない、殊に外國  
人が是れから内地に来て、日本の女を娶つて妻にする者もあらう  
し、又日本の男に嫁入する女もあらうし、又日本人の養子に成る者  
もあらう、兎に角離婚と云ふ事が行はれて、所謂合の子と云ふ者  
は澤山殖ゆるであらう、此合の子も亦外國の籍に入る者は外國人  
であるが、之を外國人だと云ふとで、日本に風化せしむることの  
出来ぬ様では、尙ほ更以て面白からぬ、而して是等は皆な箇人間の  
交際如何に因るものであると云ふ事は一般に了解せねばなるまい

### 男女交際の事

男同志の交際と女同志の交際とは、自然趣を異にして居るが、  
其事は姑らく措き、男子と女子との交際に就て一般の有様を見る  
に、今少し女子を好く取扱ふたならば宜からうかと思はれる、男  
女同権論などもあり、女権擴張などの説もあるが、ソナナ事を  
今言ふ積りはない、隨て其利害も別問題として、どうも男子の  
女子を扱ふ工合が少し改良を加へたいやうに見える、尤もこれは  
男と女子との關係に於て、權利義務の論をするでもなければ、一家  
内に於ての有様を説くでもない、唯通常の交際に於ての事のみを

云ふのであるが、何うも何となく取扱ふ工合が、粗略過ぎて居り  
はしないかと云ふやうな感がある、歐米に於ては餘程女を尊敬す  
る、大切にする、これは種々理屈もあるが、ツマリ習慣は多いので  
ある、就中米國邊では女の權力が非常であるから、これは又別  
物であるが、歐洲の諸國に於ては大體に於ては日本と類似した場  
合も随分ある、が併し兎に角表面に現はれた所では女の方を尊敬  
する、尊敬すると云つては語弊があるか知らぬが、丁寧に取扱ふ、  
尤も其弊として女が随分八釜しく云ふ、較増長して居るやうに見  
ゆる場合もある、例へば鐵道に乗る、同室に於て煙草を喫むこと  
はならぬ、これは宜しい、同乗して居る女の許可を得なければ喫

まれぬと云ふ習慣であるが、それも宜しい、女の嫌ひなものを喫  
で困らせると云ふことは宜しくない、随分婦人の煙草を喫む國も  
あるが、通例女子は煙草を喫まぬとしてあるから、其前で喫まぬ  
のは夫は至當であるが、婦人に煙草を喫んでも宜しいかと云つ  
て、許可を乞ふと云ふ其事柄が既に失禮であると云つて腹を立て  
る女がある、甚しきに至りては、倫敦邊の地下鐵道に乗る、煙  
ばかりの鐵道である、尤もこれは石炭の煙で煙草の煙ではないが、  
併しながら其煙ばかりの汽車中で、吸煙室が備へてある、其吸煙  
室の即ち煙草を喫む室と書いてある部屋に、何うかすると女子が  
這入て来て、さうして傍の者の煙草を喫むのを八釜しく言て怒る、

これは随分酷い話だ、畢竟女子の待遇を好くして居る弊であらうと思ふが、それ程の弊まで引受ける必要は無論ない、又ソソナにするには及ばぬ、日本の汽車に乗て、西洋の婦人の前で煙草を喫だのが悪いと云つて、東洋の事情を知らぬ西洋人などが怒つたと云ふこともあれば、又日本人にして殊更に西洋の真似をして、終日煙草を喫まらずに居つたなど、云ふ話もあるがソソナ事をするに及ばぬ、日本では女子も煙草を喫む人が多い、失禮も何もない、斯う云ふ習慣の處に来て、歐米人が八釜しく云ふ理由もなければ、又歐米人の真似をする必要もない、故に其邊は大概にしてアマリ女を困らせさへしなれば宜しい

右等は別として一般の有様に就て今少し改良を加へたい、例へば男女共に歩くとき云ふやうな場合に於て、夫は先に立てズン／＼歩、婦が之に追附が爲めに難儀して居ると云ふやうな様子も見えたり、或は又人力車に乗つたのを見ると、男の方は横柄に大きくなつて乗つて居が、女の方は小さくなつて窮屈さうに乗つて居ると云ふやうな風がある、事々に男の方が何うも権力を振り過ぎて、女を冷遇すると云ふやう





な傾が見ゆる、或は又汽車に乗つた場合でも、乗客が込み合つて立て居らなければならぬと云ふ場合に、女が這入て來ても、男が起て席を譲ると云ふやうなとは少もない、平氣で腰を掛けて居るのみならず、或る場合には横になつて足を投出して、夫が爲めに女が腰を掛けることも出來ず、立往生をして居ることなどがある、これは必ずしも歐米の風を真似て云のぢやないが、日本風としても餘り酷い、勿論見ず



知らずの人で、ドンナ身分の人か解らぬが、兎に角男女と云ふ關係から、女に席を譲つて男が立つのが相當であらう、歐米などでは下女が乗合馬車などに這入て來ても、立派な紳士が夫が爲に座を譲つて立て居なければならなかつたりするやうなことがある、それも酷いやうであるが、併し是も下女と思へばさうであるが、女に譲ると思へば不思議もなからう、而して此女を好く待遇すると云ふことは、教育のある立派な紳士の所行であると歐米では信じて居る、又實際さうである、教育のある立派な紳士でない以上は、女を粗末にして居るが故に、さうも女を粗末にせぬ者は即ち教育があり立派な紳士である、さう極つて居るから、大概の者は

立派な紳士らしく見て貰ひたいから、自然に之を見習ふのである。日本では立派な紳士で教育のある人であらうが何んであらうが、女などは願みないと云ふやうな顔附をして居る、却て其方が乘いやうに心得て居るらしく見ゆる、立派な身分の人や紳商とも言はるゝ人が、妻君を連れて汽車などに乗つた時は何うであるかと云へば、妻君は恰も下女の如き有様である、亭主は傲然として威張て居る、随分見苦しい、さう云ふことは是れから少し注意するが宜からう。

全體女と云ふものは大體に於て男よりは弱い、弱いが故に之を勞つて遣ると云ふのは當然である、弱い者窘めをするは男子の所行

でない、女を粗末に扱ふと云ふとは即ち男子の所行であるまい、例を擧げて言へば幾らもある、幾らもあるが、何時の場合にしても男子が一步進んで、女子が一步退いて居る、而して何時の場合に於ても男が女を好く扱はずして何となく粗畧にする、尤も此女を勞つて遣ると云ふ風は、下手に遣ると女をして増長せしめると云ふ虞がある、或る學者の説に、女と云ふものは中道を歩むことが出来ない、何方かに片寄るものであると、何うも夫が實際に照して見ると明言であるやうだ、それで女と云ふものは悪くすると増長すると云ふとは間違ない、併しながら夫は或る程度の話で、少々待遇を好くして、社會の體面を装ふと云ふことに於ては、さ

う非常なる弊害があらうとは思はれない、既に云ふた煙草の話でも、  
 歐羅巴に於ては一ツの弊であるが、日本では此弊の起りやうがない、  
 何故と云へば男女皆煙草を喫むからである、又汽車などで女に座を譲つて見た所が、  
 女が之が爲めに増長して、始終汽車の中で寝轉ぶと云ふやうな不行儀をすることもあるまい、決して  
 夫が爲めに女が増長すると云ふやうな愛はないのである、大阪では白晝藝者など、  
 相乗をして歩く有様が、如何にも平氣のやうに見えるが、夫が夫婦ともに歩く時には、  
 少し氣差かしいでもあるかの如く見える、其邊に至ては何うも了解の出来ぬ事はかり多い、  
 大阪に限つた話ではないが、女と云ふものを今少し好く扱は

なければ往くまい、高尚の理窟から云へば、女の善悪に依て小兒の教育が何う斯うと云ふやうな事もあるが、ソナナ理窟は姑らく措いて、  
 兎に角女と云ふものは今少し好く待遇し、今少し品位を保たせると云ふことは、  
 總ての事に就て有益なることと思ふ、全體男女間の交際に限らぬ、  
 男同志の間にも、種々の弊害があるから、序でに言つて置くが、  
 何うも互に讓合ふと云ふことは男子の間にも誠に少ない、  
 知合同志の間では、男女でも又男同志でも随分能く禮讓を正すやうに見えるが、  
 もう知らざる人に出逢ふた時には、途中でも道を讓合ふと云ふやうなことは少ない、  
 總て何事に拘らず、互の間に多少禮儀の心得がなければならぬ、禮

儀とか何とか云へば八釜しいやうだが、互に讓合ふと云ふ考がなければならぬ、何ぞあつて少々込合ふと云ふやうな場合には、吾先にと争つて亂暴の極に達すると云ふことは、必ずしも下等社會ばかりではない、少しく體面を装ふて行かうと云ふのには、互に讓合ふと云ふの必要がある、夫が何うもさう往かぬ故に、尙更婦人の如き弱い者に對しては、讓合ふと云ふことが少ないであらうと思ふ、故に先づ男女の間の交際を改良して、今少し婦人を好く待遇しやうと云ふには、男同志の交際に於ても、今少し讓合ふと云ふことを考へなければなるまい、若しさうでなくして常に交際上には讓合ふと云ふ考がないと云ふと、往來で出逢はうが何處

で出逢はうが、事々に殺風景に流れて、互に相軋り又は相凌ぐと云ふやうな狀況を生じやうかと思ふ

名刺の事

名刺の折り方に就ては、前にも少しく述べたが、全體名刺は何ういふものかと云ふに、其人の姓名又は姓名と共に身分職業などを印刷したるものである事は、云ふまでもなき話なるが、名刺の調製方は支那の様な大なる紅紙を用ひるものは別として、歐米各國大小の別は少々あるが、大概同様である、日本でも普通は大概同様で別段不體裁のものもない、但し稀れには金縁を附けたものも

あり、又極めて小形にて洒落た風なものもありて、藝者でも持ち  
 さうな名刺もあるが、是れはチト褒た體裁の様でもない  
 名刺は何ういふ時に使用すると云ふことは、誰でも知つてる様だ  
 が、併し時として間違た話もある、例へば宮内省か行在所へ何か  
 の御禮か御祝に参内したときは、誰も名刺を出す者はあるまい、  
 皆御支關に備へてある簿冊に姓名官職位勲等を自記することに  
 て、是れには間違話もないが、皇族方の御邸又は御旅館に伺候し  
 たときに、名刺を出すものは度々あると云ふことだ、是れは随分  
 酷い間違で、皇族方の御邸や御旅館に伺候したるときは、矢張り  
 簿冊に記名すべき筈のもので、決して名刺を出すものではない、是

は西洋でも何地でも同じ慣例である、尤も西洋では皇族方に限ら  
 ず、支關に簿冊を出して來訪者の姓名を自記せしむる慣習は幾ら  
 もある  
 又日本では集會の席や又は他人の宅にて、相客となりたる場合な  
 どに、直ちに名刺を出して己れ自ら人に紹介することも多い、然  
 るに西洋ではユツナ場合に無暗に名刺を出しはしない、大概誰か  
 に紹介して貰ふ様であるが、日本では直ちに名刺を出す、名刺を  
 出す方が、分りよくもあらう、又記憶するにも便利であらうが、  
 併し外國人との交際には、少しく妙ならぬ感がありはしないか、  
 西洋では名刺を出す出さぬに限らず、紹介のことは却々喧しい、

英國などでは殊に喧しい様子にて、或る人は水に溺れた者を平氣  
で見てるから、何故救はぬかと云つたら、彼の人とは未だ紹介  
が済んで居らぬと云つた、と云ふ悪口もある程で、紹介は随分喧し  
い、已むを得ざる時々の外は、己れ自ら紹介せずして、必らず他  
人を頼む、名刺とは關係の薄い話だが、是れも心得て居る方が宜  
からう  
又名刺を出さぬ場合は、晚餐や夜會に招かれて行たときは、無論  
名刺を出さぬ、是れは日本でも大概同様で、心得違ひなからうと  
思ふが、其他妻君の受日と云つて、面會日を定めて置く、其受日  
に行つたときには名刺は出さない、勿論此受日には初對面の人

誰かの紹介がなければ勝手に行きはしない、大阪では受日も何も  
ないから、何うでも宜しいが、併し追々内外人の交際も繁多にな  
るとすれば、覺て居て損もあるまい

警察官

日本の警察は大變能く行届くと云ふ評判である、それは外國人の  
失つた金が早く見附つたり時計が還つて來たりするから、爾う云  
ふ評判があるであらう、又一方から見れば日本の警察官程潔白の  
ものはない、各國の警察官は殆ど多少の酒代を取ること、平氣に  
心得て居る、尤も此酒代を取ると言つた所が、それが爲めに法を

曲げるの何う斯うと云ふ程のことはないから、賄賂など論ずる程のことでもない、是は警察官に限らぬ、歐米では何様な者にも酒代を遣る癖があつて、或る國などでは夜會に招れて其處の支關で着物を預かる、此の着物を預る人は亭主の方で雇入れた人か、或は通例召使ひ居る人であるが、是にも一寸と酒代を遣る習慣さへある、故に此警察官や其他の小役人小使などに酒代を遣ると云ふことは、世間で喧しく論ずる所の賄賂とは大分性質が違つて居る、歐米にも賄賂の問題は盛にあつて、是は斯様な酒代と云ふやうな類ではない、が日本の警察官は兎に角此酒代も取らない、日本へ来て見ると丁度歐羅巴の封建時代の有様を、現在に目撃する

ことが出来るど歐羅人などが評判して居る通り、所謂武士の風を存して居ることが多い、今の警察官は盡く武士ではない、平民も多く雜つて居るであらうが、兎に角其氣風が武士風である、併しながら此氣風も亦一方から見れば、實は警察官獨り爾う云ふ風であるのではない、日本人一般に其氣風を受けて居るのである、是は先づ宜いことに違ひないが、多少將來は變化するであらうと云ふことも心得て置ねばならぬ……故に警察官の比較とか、或は事務の行届くとか行届かぬとか云ふやうな問題を今言ふのではないが、其人民に對する工合と云ふものを見るに、封建時代の武士の風があつて、酒代を取らないと云ふは宜しいが、それと同時に

是が武士根性でも云ふものであらうか、何分にも通例の人間に對して威張つてるやうな傾がある、どうも其邊に穩ならぬことが多い……又外國人に對しては何うであるかど云ふと、二ツの極端である、一は無闇矢鱈に丁寧にして、何でも言へぬ外人崇拜など、國粹論者から力まされさうな體裁をして居る、又他の一方は之を疎外してさながら、昔の勅王家が夷狄でも見るが如き體裁をして居る、是は孰れも宜しい



ことゝは思はれぬ、第一警察官は外國語を知らねばならぬのであらう、是から内地雜居の曉には尙更その必要を感じるであらう、然るに此外國語を知るところを大に誤解して居る話がある、外國人は日本へ来て日本の保護を受ける人であるから、彼等の方で日本語を學ぶのが必要である、吾々は何でも日本語で言ひさへすれば宜しいのだ、西洋人が解らうが解るまいが、解らぬければ自業自得で彼等が損する丈のことであるのに、日本と外國とは國勢が違つて居るのだから、據なく外國語を學ばねばならぬなど、勝手な理窟を並べて居る者がある、是は大間違のことで、警察官たるものは何うなり斯うなり一箇國や二箇國の言葉が解らぬでは



其職務を行へやうがない、外國人が其處に踞座んで居つても尋問の爲やうもない、是が火を放けるのやら泥棒をするのやら判らぬのである、又助を乞に來た者があつても言葉が解らぬければ何うすることも出來ない、と云つて之を打棄て置けば警察官の職務が立たない、故に是は職務上必要である、然るに之を誤解して何やら外國人に餘計の便宜を與へるが爲めに稽古するのであると云ふやうな感情を持って、怨を吞で居る連中がある……固より外國人を崇拜する必要のないことは明かであるが、去りとして此外國人は遠來の者で、土地の人情風俗或は言語にも通せず居るものであるから、是に多少の便宜を與へると云ふことは、文明諸國普通の

ことである、普通の人民さへ其心得のあるべき筈であるから、況や人民保護の職務を帯びて居る警察官に於ては當然のことである故に外國人は成るべく親切に取扱つて、丁寧に物を教へ、不自由を感じさせぬやうにして遣るが、差向是等の人の職分であらうと思ふ、

御 役 人 風

日本人は何事に對しても中道を行くことが出來ない、無闇に親切過ぎたことを遣るかと思へば又無闇に冷淡に接待ふと云ふ外評がある、吾々は決して此の評に感服しないが、シカシ試に鐵道

に乗つて見玉へ、上等に乗れば鐵道の小使や小役人を叱り飛ばし  
ても彼等がへい／＼して居る、中等に乗つても彼等は少し我慢し  
て居る様子だが、下等に乗らうものなら、此方が威張るところで  
はない、却て小使や小役人に叱り飛ばされ、賃金を拂つて忍入つ  
て乗つて居るのである、先づ普通の商賈から考へて見れば、下等  
に乗らうが何に乗らうが兎に角お得意様だ、然るに此奴を荷物同  
様に取扱つて、宛然豚でも扱ふやうに箱の中に逐込むと云ふのは  
随分酷い話だ、尤も是は歐羅巴の文明國にも無い話では無いが、  
日本で遣る程ではない、日本で遣るのは何かと云へば、矢張威張  
たがるのである、それは鐵道にも限らぬ、市區役所とか町村役場

とか云ふ處は勿論、土方人足まで兎角其癖はある、甚しきに至  
ては郵便配達人が人の家に郵便を抛り込に、家人の取次やうが悪  
いと言つて小言を云ふ、上の御威光を笠に着ると云ふのか、兎角  
威張たがる、故に一般の風は何となく力んで居る、或る外人が、  
日本の町を歩いて見ると悲しんで居る者か怒つて居る者許りであ  
る、嬉しさうな貌をして居る者は一人もないと言つた、是も随分  
酷い評であるが、併しながら市中を歩いて見ると、何さま悲しさ  
うな顔をして居る貧相の者か、爾うでなければ何やら澄し込だ體  
裁を作ると云ふやうな人が多い、髭鬚などを生して居る連中は、  
尙更人を睥み附るやうな風をして居る、爾う云ふ事情であるから

警察官が立て居る所などを見ると、何となく怒つて居るやうに見  
ゆる、開けない國であれば仕方がないと諦めも爲やうが、最早日  
本も文明國の仲間入を爲たことであるから、従來の弊風を改めて、  
國民互に相接するにも最も公平に最も親切にすると云ふことは、  
適當であらうと思ふ、勿論斯く言ふた所が、數年前に比すれば、  
都も鄙も雲泥の違ひであつて、決して昔のやうな御役人風がない  
と云ふことは明かであるが、まだく文明國たるに耻ぢないとは  
言はれないやうに見ゆる

### 兒女の整列

近來學校生徒を整列させて置くことが流行する、歐羅巴各國の者  
は立て居ることに慣れて居るから左程でもあるまいが、日本人な  
どが歐米に往て、歐米人同様に整列して居ることは却々難いもの  
である、況や幼年の發育十分ならざる者を連れて來て、一時間も  
二時間も往來に立せて置くこととは、衛生上何であらうか、  
生徒は或は面白半分に瘦我慢をして立て居るかは知らぬが、併し  
ながら之を率うる教員は勿論のこと、警察官も亦多少其邊に注意  
するが宜からう、現に此間も小學校の生徒が、長い時間立せられ

て居たのを見た、殊に恐るべきは女学校の生徒やら何やら、妙  
 の女子が整列して居たことである、女子をして長く立せて置くこ  
 どの衛生上大害あることは、歐米の社會には一般に認めらるゝ所  
 であつて、先年巴里の或る大店の賣女子が、残らず腰掛を用ひず  
 に立て居ることに就て、婦人協會から喧しく言つて、遂に腰を掛  
 けることを許した例もあつたが、兎に角女子をして長い時間立せ  
 ると云ふことは、男子よりも著しき害を被ることであるのに、  
 是れも恬として怪しまなかつたのは、教員の注意が届かぬのであ  
 らうが、警察官も亦其の邊は多少斟酌して注意を與へるのが其職  
 分ではあるまいかと思ふ、兎に角敬禮を表するなど云ふことも

表し方がある、今の文明の世の中にあつては、決して途方途轍も  
 ない事をしたから敬禮を表したと云ふ譯には行かない、昔は主人  
 に逢ふて土下座をしたり、地面へ頭を摺附たのが敬禮であつたが、  
 今日では敬禮を表すると云つても、整列して頭を下げると云ふ位の  
 ことに改まつて居るではないか、それを成るべく丁寧にするが宜  
 いからと言つて、土下座をした所が敬禮を表したと云ふ譯にもな  
 るまい、故に之に就ては餘程注意を要することであるが、此邊は  
 歐米各國に比すれば未だく開けぬやうに見えるから、當局の人  
 々は能く注意して、長時間整列するばかりが能くないと云ふこと  
 を悟つて貰ひたい

或人に答ふ

何人なるやは知らねど、本欄に掲ぐる記事に就き、左の書面を送られた人がある

貴社でたため項中種々西洋事情を噛んで含める様に御掲載に相成り能く其急所を掲ぐるには實に感服仕ります、尙は雑居の時に相成るに付でたため項中に此最も必要の記事を御掲げに相成るは見る人難談くらわに見流すやの恐れある様に存せらるゝに付御改題の上續々此等の記事御掲載あらんとを希望す、或る人は云ふならん西洋人が日本に來たら本邦風俗に従へど、な

れども是れは到底我に利あらず、夫のみならず西洋を真似たら何處までも真似たる方宜しからん、例て云へば新調のフロッコートにラッコ襟の御膳上等百圓以上も拂つた服を着ながら、フランチルシャツにゴム襟を付け居つては僅かのこととで打毀してしまふ是れは知らずになす事なれば實にお氣の毒に存じます、御承知の通り歐洲諸國では一着二磅の服を着る者でも、デイシヤツは着て居りますからナ、本年洋服廻禮者の随分妙なのが澤山ありました、襟紐の事なども教てやつて下さい、御尤の御注意にて、記者大に謝する所なるが、シカシ衣服の事に就ては、既に委しく前にも述べ置きたることにて、今更ら之を繰

返すにも及ぶまいかと思ふ、故に夫れはそれとして姑く措き、改題の事に至りては、左程まで此欄の記事に重きを置かるゝは、感謝の至りなれども、此欄の記事を掲ぐる最初に於て少しく辯じ置きたる通り、でたらめと題せばとて、決して嘘八百のでたらめを云ふ積りではない、其云ふ事柄に至りては、真面目の話である、唯だ順序もなく思ひ出るまゝに筆記して掲ぐるものなれば、之をでたらめと題したる次第にて、先年栗本鋤雲翁はでたらめ脚紙の題を掲げて、舊幕末に於ける外交談を載せたることありと覺ゆ、記者敢て翁に做ふには非らざれども記者は此記事を以て決して雑談をなすものに非らず、但し讀者の容易に了解せらるゝことを望

みたれば、例證も成るべく卑近の事に取り、小六かしらことを避けたれば、或る人の注意も起り、讀者も亦或は雑談と思はるゝこともあらんが、或る人も他の讀者も、記者の意思を解せられよ

音讀の事

聲を張り上げ節を附け面白可笑しく音讀せざれば、意味が解からぬと云ふ人がある、随分厄介な人物と思ふが、去りて其習慣の人は俄かに黙讀すれば、必らず居眠りでもするであらうから致方ないが、ソナナ人は成る丈け人前では止める様にして貰ひたい、自分の家に居るときなら、家内は迷惑するかも知らんが、兎に角を

の自由じゆうに任まかせても宜よろからう、又自由じゆうに任まかせずと云いつた所で、人間にんげんの自由じゆうは他人たにんの私事しじにまで立た入いることは出来できない、故ゆゑにそれは先まづ自由じゆうに遣やつて宜よろしいとして、人前ひとまへで音讀おんどくするだけ  
 は止めぬと、他人たにんが迷惑めいわくする、ステーションの待合所まちあひしよにて盛さかんに音讀おんどくするなどは、其文字そのたんじを知しつてゐる事ことを吹聴ふいせんするつもりかの様やうにも見みえ、甚はなだ妙めづならぬ次第しだいだが、待合所まちあひしよはマダ宜よろしい、汽車中きしやうちうで盛さかんに音讀おんどくされては溜なつたも



のでない、新聞しんぶんなどを取とり出だして呻うなり始はじめる人は毎度まいど汽車中きしやうちうにある、何分なにぶん同車中どうしやうちうの者ものは困こまり切きる、中なかには艶種つやたねなどを聲高こゑたか々と眞ま面目じめいに讀よみ上あげて、吹出ふきださせる連中れんちうもある、夫それも日中ひつちうはマア宜よろしいが、夜行汽車やかきしやなどでは殊ことに閉口へいこうする、汽車きしやの進行中しんかうちうは汽車きしやの響ひびで隣席りんせきでなければ、左ひだりまで感かんせぬこともあるが、停車ていしやするや否いなや、驚おどろかされることもある、迎むかひ眠ねられも何なにんにも出来できはしない、旅行りょぎんは道づれでお互たがひに人ひとを困こまらせん様やうにするのが肝腎かんじんだ、外國こくごの汽車きしやなどではコンナ事ことを遣やるものもないが、若もし遣やつたら大變たいへんだらう

元來もとより日本にっぽんでは例れいの子日しのたまはくから養成やうせいされた爲ためめか、音讀おんどくの癖くせがある

斯く云ふ記者なども幼少の頃は盛んに音讀をやつた方だが、黙讀を始めてからと云ふものは、逆もく音讀は出来はしない、何分音讀をすれば咽喉も痛くなるが、意味も分らなくなる様だ、是れは記者ばかりでない、誰でも黙讀する人はさう云つて居る、去りながら黙讀も音讀もツマリ習慣で、何れでも慣れさへすれば宜しからう、決して世間の人に音讀を止めるとまでは云ない、可笑い様ではあるが、音讀を好くなら、音讀し玉へたが、人前では宜しくない、殊に汽車中などは最も宜しくない、或る人はナニ構ふとはない、新聞を人の讀むのを聞て居れば、丁度他人を雇ふて讀ませて聞てる様なものだ、新聞を買ふにも及ばなければ自ら讀む

勞もないと云つてが、ソツナ氣樂人ばかり世の中に居りはしない、お負けに汽車中で讀むのが、必らずしも新聞とも限らない、西洋人などは随分此音讀されるのには困る様子だ、西洋人が困ると云つたら、國粹保存連中は力むかも知らんが、併し内地雜居にもなる程の世の中に、人を困らせて威張るのも氣の知れない話ではないか、況んや西洋人ばかりでない、日本人も困るから止めたら何うだい、汽車中の事は一例に過ぎないが、何處でも人前だけでは止める方が宜しい、序に家に居ても止めるなら猶ほ宜しい、節を付けてお經を讀んでる様なのも聞ゝあるが、賞めたことでもあるまい



女らしい紳士

男は男らしい方が宜しい、とは誰も云ふことであるが、西洋流の輸入して以來は男らしくないことが澤山ある、是れ決して西洋流其ものが男らしくないのではない、之を真似る方で男のする事か女のする事か分別がつかずに遣つたことが案外男らしくなく、甚だしきは全く女同様になるのであると思ふ

維新後暫くの間は随分途方途轍もない西洋真似をやつたが、今更ら之を繰返して耻の上塗をするにも及ばない、又今ではソナナに甚だしきものも見當らないから餘程宜しいには相違ないが、シカ

シマだく大分ある、第一赤ケツト白ケツトを纏ふて歩く者を見れば、彼は田舎漢だドコの世界に夜具同様のものを身に纏ふて大道を歩く奴があるものか、なんど嘲けるけれども、田舎漢でない市中のパリくが大きなシヨールを纏つて歩くのが、今でも少々あるで



はないか、ケット類似の大きなショールを纏ふ奴は無論女のこと  
で、女も女香賣りの婆さんでいもなければ倫敦巴里の市中に見る  
ことは出来ない、紳士の纏ふのなんぞは薬にしたくもない、斯う  
云たならナニそれは時候後れの者がする事で、市中のバリく  
は決して爲ないと云ふだらう、其通りの様だがソナナ手提靴は  
何うだ、大きなのを持てば仕立屋の番頭か何んかの様だ、小さい  
のを持てば全然で女の様だ、堂々たる紳士は何處の國であんな風  
をして居るか、何んでも拘模は大層あれを喜ぶさうだが、紳士の  
風采としては提げて貰ひたくない、去りながら此等は多少必要の  
こともあるだらうから、暫く宜しいとした所で指輪のピカくや

時計の鎖のゴテくは何うだ  
指輪にダイヤモンドなどを入れたのをピカくさせて居る紳士が  
多いのみか紳士としては缺くべからざる裝飾品の様に心得て居る  
人が澤山ある、間違だらう、成程西洋の紳士もダイヤモンド入りの  
指輪を全く持たぬではない、シカシ上流社会には少ないのみか、  
婦人でさへも上流社会では餘りピカくさせることを嫌ふ、元  
來歐洲の大都會では指輪を以て人に誇らんとする者を田舎漢とし  
て賤しむか、俄大盡として輕蔑する風がある、亞米利加人などが  
巴里や倫敦で笑はれるのも之が爲めである、然るに日本では正反  
對で、何んでも紳士の必需品の様に心得て居る人がある上に、其

指輪は往々女持である、之を知らずして意氣揚々として威張る人のあるには、餘所ながら氣の毒千萬だ、吾々は指輪は紳士の裝飾にならぬ、又指輪を買ふなら女持は止したまへと忠告する  
又時計の鎖のことであるが、ゴテ／＼した大きなのは頗る品格の悪るいもので、歐洲の大都會では輕蔑する、時計の鎖が大きいとて金持の標にはならない、是れは田舎漢か俄大盡か、さうでなければ山師ものゝすることである、歐洲大都會の宴會などに往つて見たまへ、時計の鎖が全然ないのが多い、又あつた所で極めてアツカリしたものである、だから其邊にも注意して貰ひたいが、序に言つて置くが、今の紳士の時計の内には、往々女持を見る、形の小さく

一見して女持たるとの解るのもあり、又少々疑はしいがと思つて見ると寶石などを入れて、是れも正銘附の女持なのがある、女持を持つてならぬと云ふ法律の規則もあるまいが、體裁としてはチト注意する方が宜しい  
小道具で邊幅を飾る様では其心中も察せらるゝがお負けに女らしくつては尙更ら品格に觸りは仕ないか

婦女待遇に就て

先頃日本の男女の交際の事に就いて一言したところが、大に立腹して夫れは宜しくないと云つて異論を云つて來た人がある、何人

か名前は分らぬが多分昔風の人であらう、昔風の連中には異論の  
 ありさうな事だから、異論が来たところが怪しみもしないが、ま  
 た一方から云へば此の異論をするやうな人が今の世界にもあるか  
 ら、此の事柄も云はねばならぬと云ふ事情を生ずるのである、併  
 し此の異論者は我々の意味を誤解して居るらしい、我々の云つた  
 のは男尊女卑を轉倒して、女尊男卑にやれと云ふやうな話では  
 ない、  
 亞米利加邊りの悪口を歐羅巴で云ひ、またポンチ畫などに描いて  
 あるのを見ると、男が縫物をしたり、洗濯をしたり、子供の守を  
 して居る、すると女は議事堂か何かへ出て政談演説などをやつて

居る、極端を云へば其様なもので、是れは亞米利加では兎角女が  
 非常に威張りたがる傾きがあるから、歐羅巴では夫れを輕蔑して  
 斯様な悪口を云ふのである、  
 併し亞米利加とても夫れはどまでに甚しいのではない、未來を  
 想像したらば何とも云へないが、今日のところでは夫れ程までい  
 はない、ないが世界中で亞米利加はど女の勢ひの強い所はあるま  
 い、此勢ひの強い事が必ずしも悪いとは云へないが、併しながら  
 日本は何方かと云へば、歐羅巴の舊國に類似した習慣であるので  
 亞米利加のやうなものとは根本的相違があるから、亞米利加の風  
 習を真似るやうになつたら大變であらうと思ふ、寧ろ歐羅巴流義

の方が宜からう、此の歐羅巴主義は何うかど云へば趣きは少し違ふがマア日本の有様と畧して居る、夫れであるから歐羅巴風にやれど云つたところで直に女尊男卑になるやうなものではない、是れは知れ切つた話で我々は其様な事に就いて云たのではない、兎に角現在の有様を見ると、女は何時より男よりは一步退いたものゝやうであつて、道を歩くにも、車に同乗しても、汽車に乗るにしても、何に付け彼に付け何時でも女は一步下つたものゝやうである、一步下つたまでは宜しいが、何うも女を粗畧に取扱ふ、また粗畧に取扱ふのを一つの見榮のやうにして居る人もある、宅に居る時は夫婦相和して居つたところで、外へ出ると云ふと先以て

其の妻を擯斥する、何うも夫婦でないらしい舉動をする、川柳に二三町出てから夫婦伴になり、とか何んとか云ふ事があるが、二三町出てからでも何うかすると伴になるまい、然う云ふ有様は宜しくないと思ふ、今少し婦人を能く取扱ふて好からう、勿論是れは表面の話ではあるが、併し表面にしても風俗習慣の上からは然るべき事柄ではあるまいか、吾々の云ふ事は昔風の人には不向かも知れないが、縁なき衆生は度し難し、解らない連中は解らないで宜しいが、解る連中は少しく風俗の改良を行つて貰ひたい、さうでなければ日本は文明に進んだと自ら吹聴したところが、他の文明國人の目からは我吹聴ほどには見ゆまい

席 順 の 困 難

席順は外國でも難儀する問題である、席順を定めてない位の宴席なれば、長時間其席を譲合つてる様な馬鹿氣たこともない、サツくと相當の席に着くが、夫は親族又は親友小人敷の寄合のことで、それでも其席の主人か妻君が誰れは何處と指示す場合が多い様である、其他は一寸とした宴席でも、大概席順を極めて置くのが多い、其席順が極つて居れば無論誰も彼も其席に着くが、扱て其席順を極めるに何うすれば宜しいと云ふことは實に難問題で、時々閉口する事柄である

少し兼立つたる宴會にて、席順の極め様が悪いと怒て食事が済むと直に歸るとか、主人に不平を云ふとか、甚だしさに至りては、食卓に着かないとか、再び其人の招に應じないとか、云ふ様な騒動の起ることも外國には間々ある、故に席順は外國では大切な事であるから、日本でも外國人を招待する時などは、其邊に深く注意しない、意外の面倒を惹起すであらうから注意が肝腎だ、又日本人同志又は内外人を混じたる宴席でも、其注意は無論必要であつて、其順序を誤ると云ふと、折角御馳走をして、却て不平を醸し不快の念を起させ、御馳走の無になるのみか、面倒の種を蒔く様な結果になる

席順を定めることが何せ難問題であるかと云ふに、左の一例でも  
其一斑を知るに足るであらう

外交官のごときは、慣例があつて面倒の少き方であるが、夫でも  
仲々面倒はある、先づ普通の順序から云へば、羅馬法皇使節即  
ちノンスと稱するものを第一とし、其次は大使全權公使代理公使  
それから以下は参事官書記官と云ふ様な順序になるが、羅馬法皇  
使節は一人だから宜しい、大使や公使は幾人もあるから、是れは  
國書捧呈の順序に依つて其順序は定まり居り、代理公使参事官書  
記官も官等と又同官等なれば着任の順序と云ふことで席順は定ま  
るが、此等の人々に妻君があり娘があると云ふときは、妻君は夫

の席順に依つて自ら定まるとは云ふものゝ、扱て誰と誰との間  
に、誰の妻君又は娘を入れて、誰が其手を牽き世話をすると云ふ  
ことになる、多少の面倒が起るが、外交官ばかりなれば夫れ  
でもまだぐ易い問題だが、之に他の役人又は紳士などが入ると  
すれば、其入る人の位地を見て、誰と誰との間で宜しいと云ふこ  
とを定むるに困難する、又それも何うか斯うか定め得るとしても  
誰と誰とは平生仲が悪るい、それを同席せしむるには何うすれば  
宜しいか、彼の人の隣り又は前に此の人が居つては、不快かも知  
れないとか何んどか云ふ心配も起る次第で、大體極まつて居る  
席順あるものですら、斯く面倒なものにて、況して大體席順の定

まつて居らぬ者では困難極まる、是れは全く一例に過ぎないが、亦以て其困難の事情を知るに足るべしだ

### 席順の定め方

席順を定むることの困難なる事情は、前にも云ふた通りである、尤も其時一例として挙げた外交官の事は、實は困難中では先づ易い方で、其他の場合では定め方は容易ならん面倒である、シカシ是れは如何に困難なりとは云へ、何うか斯うか定めねばならぬ事柄であるが、外國の例は暫く別として、日本に於ては何うするが宜しいか、連も吾々の力には及ばんと云つて逃げた方が得

策の様でもあるが、さうでない、一と通りは日本でも極まつて居ると云つて宜しい、それを何かと云ふに、日本は云ふまでもない君主國であるのみならず、君主國中でも皇統一系他の君主國とは違ふ、それ故に日本では恐れ多いが宮中を以て一切名譽榮典の源泉となさねばならぬことは勿論の次第である、他の君主國に於ても大概同様ではあるが、尙更ら日本では然りと云はなければならぬ、現に帝國憲法第十五條にも「天皇は爵位勳章及び其他の榮典を授與す」と明示してある、宮中は名譽榮典の源泉であることは誰れも了解するに苦しむまい、であるから日本社會に於ける苟くも名譽榮典に屬する事柄は、一切萬事之より割出さねばならぬと



斷言して宜しい、故に吾々は席順定め方の類も、一と通りは日本  
 でも極まつて居る、即ち其標準があると思ふ  
 今日(こんにち)の日本(にほん)社會(しやうかい)を見れば、無論(もちろん)に昔時(いふじ)の様に四民(よんみん)の區別(くわべつ)など云  
 ふことはない、去り(さ)りて日本(にほん)臣民(しんみん)は他(た)の民主國(みんしゆこく)に於(お)けるが如(ごと)く、  
 一切(さいげん)萬事(ばんじ)何ん(なん)でも皆(みな)な平等(びやうどう)であるとは云(い)はれまい、法律(はふりう)の面(おもて)に於  
 ては四民(よんみん)の平等(びやうどう)なること云(い)ふまでもないが、シカシ(しかし)是れ(こゝ)も刑法(けいふ)民  
 法等(はふりとう)に於(お)いてこそ然(しか)る譯(わけ)なれども、現(げん)に日本(にほん)には華族(くわしゆぞく)と云(い)ふものも  
 あり、又(また)華族(くわしゆぞく)に特權(とくけん)を與(あた)へられたる貴族院(きしゆいん)の類(るい)もありて、社會(しやうかい)の  
 組織(そくし)は決(けつ)して平等(びやうどう)に出來(き)て居(ゐ)るではない、故(ゆゑ)に社會(しやうかい)の面(おもて)より觀察(くわんさつ)  
 すれば、昔時(いふじ)の四民(よんみん)はないが多少(たせう)の階級(かいきふ)はある、但(たゞ)し此(この)階級(かいきふ)は昔(いふじ)

時の武士(ぶし)の様に斬捨御免(ざんせごめん)の特權(とくけん)などを有(あ)せし類(るい)とは全く(まるごと)異(こと)りて、  
 社會(しやうかい)に於(お)ける名譽榮典(めいよえいでん)のことであるに過ぎ(た)ぎない、而(しか)して其名譽榮典(めいよえいでん)  
 典(てん)は何れ(いづれ)の所(ところ)より出(い)づるか云(い)へば、宮中(きやうちゆう)より出(い)づるのである、  
 其證據(そのしよこ)は憲法(けんぽう)に於(お)いても明(あ)かであるけれども、日本(にほん)では實(じつ)は憲法(けんぽう)な  
 しと雖(いへ)ども此(この)大義名分(たいたいめいぶん)は古來(こらい)明(あ)かなのである、斯(か)様に論(ろん)じて見(み)た  
 ならば、宴席(いんせき)に於(お)ける席順(せきじゆん)ぐらゐの原則(げんそく)はナンデもない、明瞭(めいりやう)の  
 次第(しだい)であると云(い)はなければならぬ、去(さ)りながら此(この)原則(げんそく)を實地(じつち)に適(て)き  
 用(もち)するには尠(せう)なからぬ困難(こんなん)あることは、既(すで)に述(の)べた通(とほ)であるから  
 吾々(われら)は少(せう)しく其所見(そのしよけん)を述(の)べて見(み)たい  
 右(みぎ)の理由(りゆう)から割出(わりだ)して見るに、日本(にほん)社會(しやうかい)にては宮中(きやうちゆう)に出(い)ることを

得る者ど、出ることの出来ない者との二つに分れるが、第一着の  
分界である、帝國臣民としては何人も宮中に出られぬと云ふ筈は  
ないと論ずる人もあらうが、勿論の事にして毫も異議はないが、  
それは時と場合に因ることにて、ツマリ日本臣民の權利論で通常  
の名譽榮典を説くのではない、通常の場合に於て宮中に出られる  
者は、誰でも彼でもと云ふ譯には往かない、是れは獨り日本に於  
て然るばかりではない、他の君主國に於ても同様であつて、英國  
の如き獨逸の如き最も此區別が盛であると思はれる、英國上流社  
會に於ける令嬢達は女皇陛下に拜謁を許された後でなければ、交  
際社會に出られぬと云ふこともある、況んや日本に於てをやだ、

世間ではあまり氣を留めぬ様子もあるが、日本社會では此宮中に  
出られる出られぬと云ふことは、社會に於ける名譽榮典の上に於  
ても、實に大切なる事柄である  
席順の極め方に就てチヨツと愚見を述べて見る積りであつたが、  
思はず知らず喧しき議論をする様になつたが、構はない、序だか  
ら今少し述べて見やう  
扱て宮中に出られる人と、出られぬ人にて、日本社會は先づ二  
つに分れるとして、其宮中に出られる人にも色々の階級がある、  
吾々は宮中の事に委しくないから、物知り顔に云ふことは出来な  
いが、窺かに承る所にては、宮中には宮中席次と云ふものがあ

る、此席次に因て宮中に出る人々の席順は定まつて居るが、是れは一人ごとに各箇人に就て定められたる席次にして、随分多数の人名簿に載せてある、而して其定め方は官位、爵、勳など色々の事柄を参酌して定められて居る由であるが、是れは各箇人に就ての事で、大體の方針は何うであるかと云ふに、吾々は之を窺ひ知ることが出来ぬが、シカン毎年宮中に於ける定例の御式等によりて拜察するに、大概左の如きもの様である

爵位勳ある者は、先づ大體に於て宮中に出られる人と云ても宜しからうが、其内で第一は大勳位、次は親任官、其次は公爵、從一位、勳一等、一等官、候爵、正二位、二等官、伯爵、從二位、勳

二等、子爵、正從三位、勳三等、男爵、正從四位と云ふ様な順序にて、其下は勳章に就て云は勳六等以上、位階に就て云へば從六位以上と云ふものが同じ宮中に出られると云ふ人の内でも、他と異つて居る様に思はれる、又此人々の内にも勳六等從六位以上は奏任同様の待遇とでも云ふことなら、勳三等、男爵、正從四位以上は勅任同様の待遇とでも見るべきものにて、此勅任同様の人々は觀菊御筵の類にも召される様になつて居る

左すれば爵ある者勳ある者及び位階ある者は、爵も勳も位階もなき者よりは上席を占むると云ふことは、君主國に於ける當然の順序にして、其内にも勳六等從六位以上が同じ勳位ある者よりも

宮中の御優待を蒙り、又其御優待を蒙る者の内にも勳三等男爵正從四位以上は其以下の者よりは御優待を蒙ること多しと云はなければならぬ、斯く云へば官尊民卑なりなると非難する人もあらうが、其の論は君主國には通用しないのみか、民主國にてすら佛國の如き勳章を重んずる國には通用しない、尤も官尊民卑の非難は、役人と人民との間を云つたことで、ツマリ小役人のペイ〜迄が威張たがる弊を論じたもので名譽榮典に關係したことであればまい、名譽榮典の上から云へば、役人にては爵勳位ある者の遙に下に就かねばならぬ場合は無論に多い

去りながら右は日本社會を組織する大體の道理に基て、其標準

を示したるまでにて、此外に人間社會には別に自然の階級はある名家舊家と云ふことも其一なり、長者と云ふことも其一なり、其他名家舊家でも長者でもないが、其社會に自然重きをなして居る者もある、是れは即ち天爵とも云ふべきものにして、爵も勳も位階もなかつたところで、自然人の上に立つ筈のものであるから、社會は之を無視して席順を定むることは出来ない、而して其出来ないと云ふことが即ち席順を定むるに困難を醸す基であつて、それがなければ實は何んでもない筈のものである

席順を定むると云ふことも實は少しく儀式立た場合でなければ、大概の所に定めて異論もあるまいが、儀式立たときには先づ前陳

の如き方針で之を定めて宜しからうかと思ふ、尤も此方針に依つたところで大概は取極まるであらうが、全く同等の人又は同等と見なければならぬ人のある時には何うするか、是れは無論長幼の順序にて年長者を上席にするより外に仕方があるまい  
日本では維新後舊制破壊の餘弊とでも云ふものか、席順などの事も左まで構はぬ様になり、此點は歐洲の舊國よりも遙かに亂れて居る様に見ゆるが、苟くも名譽榮典と云ふことを度外に於ては、君主國に於ける社會の秩序は立つものでない、依て些末の事の様に思ふ人もあらんが、吾々は決して左様には思はん

お客の代人

客の代人と云ふことは何な事か、是れが解る所は、日本國中は愚かなこと、世界各国中大阪を除いてはあるまい、客を招く、其來る客は本人でない、代人である、是れは大阪では度々見る悪習であるが、何處の國にコンナ所があるものか、客を招くは何の某を招くのである、然るに何の某は來らずして、思ひもよらぬ代人が來る、嫁の見會をして替玉が出た奇談はあるが、客の代人と云ふことは前代未聞世界各国無類飛切の珍聞である  
客を招くには、相客は誰々にする、誰と誰との同席は釣合は何う

であらうか、御馳走は何うするか、席順は何うするか、就中此席  
 順などに關しては、前にも言つた様に、なかく而倒で、心配の  
 ものであるが、斯くして招いた其客の内に、本人が來ずして代人  
 が來ると云つては、言語道斷何んとも評し様のない馬鹿氣な話だ  
 是れが旭日の昇る如き勢を以て、世界無比の進歩をなしたる大  
 日本帝國の其第二の都府と誇る此大阪の真中に之ありといふに至  
 つては、記者も大阪市民の一人として、穴があらば這入りたいは  
 ど恥入る次第である

全體客を招く案内狀には、何の某様と云ふ宛名がある、依て其  
 宛名の人が行くとか行かぬとか返事をするであらう、行かぬと云

へば夫れ迄の事だが、行くと云ふなら無論本人が行くのだ、所で  
 其本人が行かずして代人を遣ると云へば、第一に是れは嘘を吐く  
 のだ、さうして行く奴は何んな間拔か知らないが、恥かしいとも  
 何んとも思はず、平氣で出掛けて喰つたり飲んだりして歸る、主  
 人に對しても失禮であれば、相客に對しても失禮である、其失禮  
 は主人も相客も辛抱した處で、代人を送つた奴も、代人として出  
 掛けた奴も、世間に對して其無智文盲の馬鹿カ加減を表白するの  
 である

知らずして爲るのか、知つて爲るのか、客に呼ばれて代人を送る  
 とは驚いた話だが、何せコンナ奴を逐拂はぬのであるか、少しも

遠慮の入るものでない、サツ／＼と逐拂ふが宜しい、遠慮して逐拂はぬと、主人も同罪で、相客に對して失禮になる、斯く云ふと或る人は御尤至極其通りに相違ないが、何分にも大勢を招いた場合などには、客の顔を知らぬことがあるから、困ると云ふソナラ此代人奴は、主人の不案内に附込んで、喰ひに行くのだ、丁度拘摸同様だ、拘摸が客に化けて行くと云ふ話がある、それと同様だ、酷いとも何んとも云ひ様がない

會社の總會には代人の出掛けることが多い、大阪は總會の多いところだから、代人を送る奴は總會同様に思つてゐたらうと云ふ説もあるが、總會だつて資格のある者が委任状を持って行ではないか、

況して宴會に名も知れない奴が代人に出掛て宜しいものか、宜しくないものか、其位の事は餘つば馬鹿な奴でも解る筈だ、何でも此代人を送る奴も、代人として行く奴も、ツマル所は其御馳走を喰ひたいのだらう、御馳走を喰ひたいばかりの奴ならば、代金を與つても受取たらう、其方が生で宜しいと喜ぶかも知れない、以來此代人が來たならばサツ／＼と逐拂つて、酒代の貳拾錢も呉れてやつた方が宜しからう

ソナナことは吾々大阪市民としては、云ふのも外聞悪いけれども云はねば何時までも爲るだらう、云ふは一時の恥、云はねば末代の恥だから、没分曉漢にはお氣の毒だが、敢て一言する、チト氣

を注けては何うだい

お客の代人 (再び)

客の代人に就て、あんまり不都合の次第だと思ふから、其不都合を鳴らして責めた所が、續々賛成の書翰も反對の書翰も到着した賛成の方にはお禮を申すの外ないが、反對の方には少々言ひたい事がある

反對せらるゝ方とても、客の代人と云ふ事柄は宜しくないとは認められて居るから、此點には何の申分もないが、兎に角反對説の二三に就て辯駁を述べて見やう

其一は客の代人と云ふことは間違だらう、何んぼ何んでも、大阪の如き大都府にソナ事があり様がないと云はるゝ、御尤の事にて吾々もさう云ひたいのだが、實際あるには困り切る、是から先きは知らぬこと、是迄は随分澤山ある、嘘と思はるゝならば、宴會を爲つた人に聞いて見たまへ、困り切つた人もありませんぞ  
其二は代人を送る人は、一たび其案内を承諾した後、急に差支が起つて、據なく代人を送るのであらうと云はるゝ、ソレならば大間違だ、客に招かれたなら、速かに諾否の返事をせねばならぬ、而して斷つたなら夫れまでだが、承諾したならば俄かに斷つては大變失禮になる、シカシ人間世界のことには、何時何んなこと



が起るかも知れぬ、病氣もあれば急用もある、だから俄かに断る  
 ことも出来る筈だが、其時は申譯をして出ないまでのことだ、代  
 人などを送つて、其代人が平氣で本人同様に飲んだり喰つたりし  
 て歸つては、失禮ども何んども申様のない話だ、宴會はお寺の坊さ  
 んが來なければ、佛事が出來ぬ様な譯ではない、據なき差支が  
 あれば來ないで宜しい、代人に來られては、相客に對しても相濟  
 まんことになる  
 其三は主人の方に對する小言で、全體代人が來たとて其代人は申  
 譯を云ひに來るのであるべき筈で、飲んだり喰つたりするのでは  
 なからう(決して信用せぬ)だから、ハアさうですか、御出は出來ま

せんか、宜しい、お歸り下さい、と云つて其代人を門前拂にすれ  
 ば宜しいと云ふのである、代人をさう解釋すれば、夫れで宜しい  
 様だが、此代人先生なかくさうでない、ズウくしくも受附に  
 案内させて衆客の居る室に入り、某は出られませんが私は代人  
 に出ましたと、平氣で云ふのみか、恰も自分が招かれて來た様に  
 衆客に交りて談笑し、衆客と共に食事する、随分氣樂なもんだ、  
 ソコで主人の方では、却て氣の毒になり、逐拂ふ譯に往かずして  
 ツイ客扱にする場合もある、去りながら此場合にも主人は勇を  
 鼓して逐拂ふ方が無論に宜しい、故に主人が之を寛大に見て置  
 ては、相客に對しての失禮は、主人も同罪だと、前にも云つたので

ある、シカシ無理が通れば道理が引込む、元來代人を送ることを止めて貰へば一番宜しい

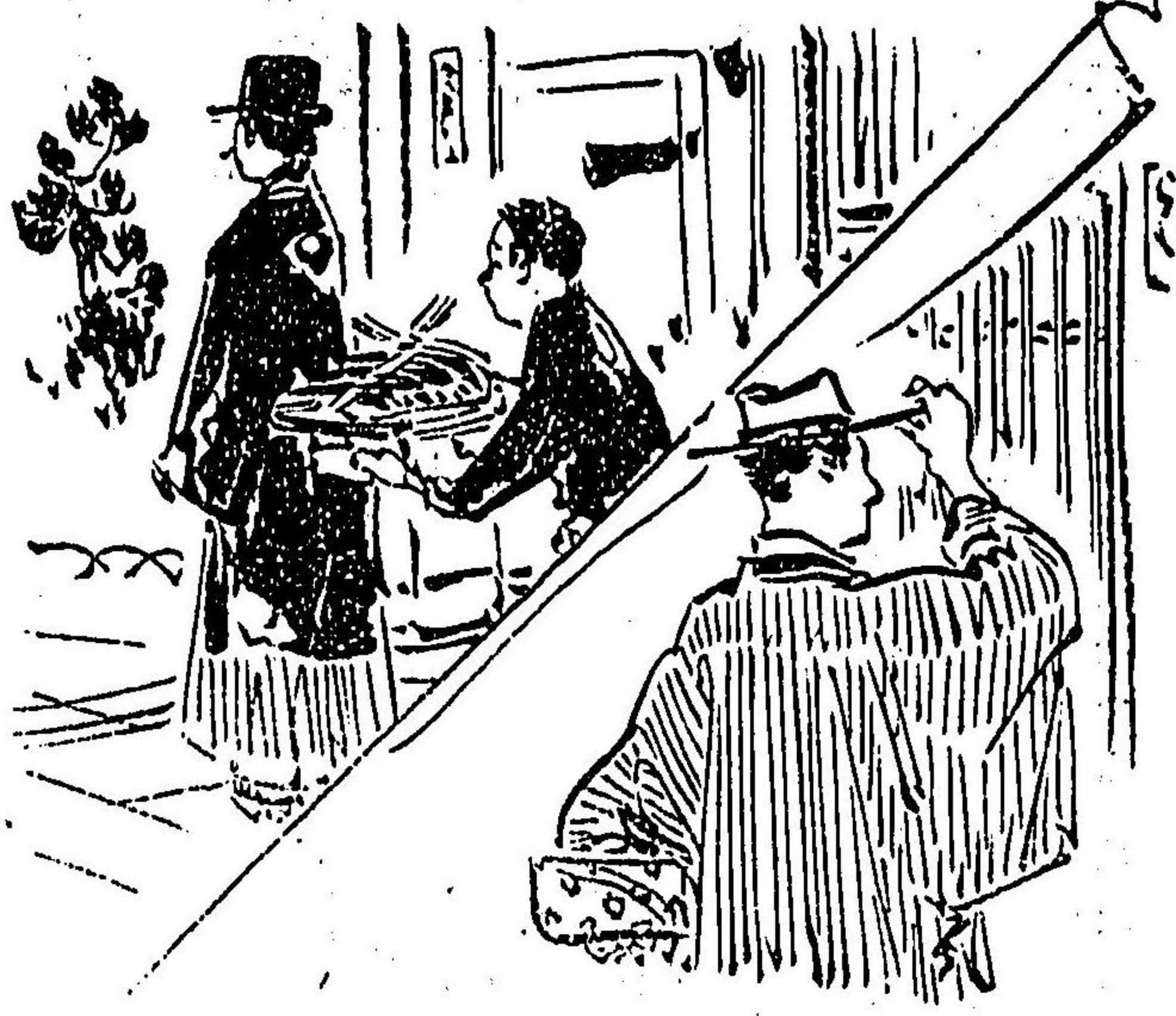
右の外にいろくの説を申越された人があつて、中には、先頃の記事に代人も代人を送る人も皆んな奴と云つたのは、慘酷なと云ふものもあつたが、成程慘酷かも知れない、けれどコンナ人を當り前にも云はれまいでないか、内地雜居も近き内に在ることだ文明國の仲間入りをした以上は、代人などは止めて貰ひたい、西洋人などが聞いたなら先づボンチ繪ものだな

贈物の弊

贈物即ち人に物を贈ると云ふ事は、西洋にも日本にも何れの邦にもある習慣だが、日本の贈物は西洋の贈物とは大層場合が違つて居る、西洋にては紀念物と云ふやうな場合は別の話だが、普通物を遣取すると云ふ事は少ない、日本にては是れに反して人の宅へ行くには大概土産物を持つて行くと云ふやうな習慣になつて居る、此邊が西洋とは全く相違して居る、結局西洋では贈物をする事が少ない、日本は甚だ多いと云ふ事情である

日本では普通人の宅へ行く時に土産を持つて行くと云ふ習慣の外

に、盆どか正月とか云ふやうな場合は、殊に互に贈物をすると云ふ習慣になつて居る、此の贈物をする事は必ずしも悪い習慣とは云へない、最も其の贈つた品物が其他に贈られ轉々して元へ歸ると云ふ奇談もあつて實は表面の儀式一遍であるやうな場合が多いが、兎



に角古來の習慣であるから強ひて之を廢すると云ふ必要もなからう、必要はなからうけれども斯様な事は漸次に改めなければ無益な手数をすると云ふ結果に陥る、西洋の事が流行すると云つて一から十まで西洋の通り真似も出来まいが、去迎現時の姿では漸次に困難になる、虚禮の度が烈くなる、之を改めんければ互に不便を感じ不利を醸すであらう内地雜居が始まり、西洋人が來ると云ふ事になれば、其の西洋人との交際は、今よりは多くなる譯であるから、多少西洋の習慣を知つて居るが宜しいと思ふが、併し必ずしも西洋人との交際に限らない、日本人同士に於ても可成其虚禮に屬するものは止める方

が宜からう、さうでないも或る人から或る品物を貰つた、其價が凡そ五圓位であつたから、我よりも五圓位の物を返禮すると云ふことか、又は彼の人が五圓位の物を持つて來たが甚だ氣の毒であるから、拾圓以上の品物を遣らんければならぬと云ふことか、種々其品物の取遣をするに就いて心配することも多い、勿論其取遣の仕方に依つては、或は世間から賄賂であるの何んのと攻撃を受けることもある、又賄賂も斯様な場合に行はるゝこともあらう、兎に角物を取遣りすると云ふ事はあまり宜い習慣とも思はれぬ、西洋と日本と違つて居るから、改めると云ふのではないが、多少弊害を生じさうであるから、是れは改めた方が宜しいではあるまいか

### 東西習慣の相違

日本は追々西洋に近似したと云へ、今日に至ても全く反對の事が多い、其中の一として贈物の場合とか御馳走の場合に彼我の間に習慣の反對して居る事を云つて見やうならば、西洋では人に物を贈るとき、此物は大層宜しい、珍しい、また美味しい物であるから、お前さんに贈ると云ふやうに遣り掛けて居る、日本では是れに反して珍しくもない、結構でもない、美味くもないがお前さんに贈ると云ふやうな事になつて居る、御馳走にしても其通り、何